

■■■■■■ 紹 介 ■■■■■■

マルクス「経済学批判体系プラン」にかんする
コーガン (Коган, А.М.) の研究

中 野 雄 策

は じ め に

「資本論」第1巻発刊100年(1967年) およびマルクス生誕150年(1968年) をむかえて、ソ連邦においても、マルクスの学問と思想の根源にあらためて光をあてようとする多くの研究が発表されている。ここに紹介するA・コーガンの3つの論文も、そうしたソ連邦におけるマルクス研究の最新の奔流のなかからひろいだしたものである。それは、マルクス主義的社会科学とりわけ経済学の方法論にあたらしい視角から接近しようとするところみのひとつである。

経済学におけるマルクス的方法とは、おそらく「科学的抽象と発生学的叙述」として要約することができよう。コーガンの研究にみられる一貫した志向は、こうしたマルクスの方法を、たんに「資本論」体系のなかで確認するだけでなく(ローゼンターリやイリエンコフの研究はその代表的なものである。——〔訳注2〕参照)、マルクスの構想した経済学の批判的体系の全体にわたって確認しようとする点にある。ここからまずでてくる問題は、マルクスが構想したもの(経済学批判体系)とマルクスが実現しえたもの(資本論)とのあいだの方法論上の連関をあきらかにすることである。よく知られているように、この問題はわが国でも戦前来、いわゆる「プラン問題」として学問的討論の対象とされてきた問題であり、高水準の業績も数多く発表されている(さしあたり、宮本義男「資本論研究」、大月書店、をみよ)。プラン問題の核心は、(1)、マルクスは「資本論」の執筆過程で経済学批判体系プランを変更したか否か? (2)、変更しなかったとすれば、「資本論」の対象領域は経済学批判体系プランのどの部分に相当するのか? という問題である。こんにちわが国では、いわゆるプラン「変更説」を文字どおりにうけいれるものはほとんどないという意味において、うえの第1の問題は決着しているかにみえる。

他方ソ連邦については、もともと基礎的研究の過程でどのような学問的議論があるのかほとんどわからないのが現状であるが、プラン問題にかんするかぎり、「剰余価値学説史」(新版)第1分冊(1956年)への編集者序文のなかでML研究所(モスクワ)の公式見解がだされており、いわゆるプラン「変更」説が支配的であることはまちがいないものとおもわれる(なお、ソ連邦におけるプラン「変更」説がもつ權威の源は、コーガンによると、1940年代におけるD・ローゼンベルクの研究にあるらしい。またML研究所の公式見解については、佐藤金三郎氏の詳細にわたる文献考証的批判がさいきん発表された。「経済学批判体系と『資本論』——手稿「経済学批判」(1861~63年)を中心として——「資本論の成立」, 経済学史学会編, 岩波書店, 1967年, 所収)。したがって、ここに紹介するコーガンの研究——はっきりプラン「不変」説をとっている——は、すくなくともソ連邦においてはユニークな異説であるとおもわれるし、内容的にもわが国のいわゆる「両極分解説」にちかいものをふくんでいる点で、興味ある論文である。ただし、コーガンのばあいは、現存の「資本論」はけっして何らかの意味での「完成態」ではなく、とくに第3巻には「特殊理論」にふくまれるべき多くの材料が残置されているとみており、その主たる原因を、(1)とくに第3巻においてマルクスの最終的加工がなされなかったこと、(2)なかでも第5篇においてエンゲルスが最終的加工の努力を「三度はやってみたが、しかしそのつど失敗した」こと、などにもとめている。ここから、もしマルクスがみずから印刷用の最終稿をしあげたならば、たとえば第3巻第25~35章にふくまれている「特殊理論」的材料はとりのぞかれたであろう、とさえ推断しているのである。(もっとも、信用関係の研究にたいするマルクスの態度のうえにある種の変化があったことは、コーガンもみとめている。しかし、この変化もけっきよくは、一般理論と特殊理論への叙述体系の2重化を前提したうえでのことであると結論している)。

コーガンの第1論文は、方法論の見地からプラン問題全般をあつかっており、第2論文では、競争論の位置づけを市場価値(価格)論との関連であつかい、第3論文では、第3巻第5篇における信用論の性格分析をおこなっている。それぞれ別個に発表された論文であるが、一貫したテーマをもつとかがえられるので同時にとりあげた。(コーガンの研究の特色のひとつは、プラン問題を徹底して方法論の問題として論究している点にある。この点からみてすくなくとも土地所有や賃労働にかんする特殊理論にも言及されてしかるべきであるが、いまのところそのような資料はみあたらない)。

以下でほぼ全訳紹介するコーガンの3つの論文の原名および掲載誌はつぎのとおり。

- (1) マルクスの未完成研究プランについて (О Неизученном Плате Исследований К.Маркса, Вопросы философии, 1967г. No.9, стр 77~87 [哲学の諸問題, 1967年, 第9号, 77~87ページ])
- (2) К.マルクス「資本論」における価格理論 (Теория Цены в «Капитале» К.Маркса, Вестник Московского университета, Серия VII, Экономика, 1966г. No.4, стр.17~25 [モスクワ大学通報, 第7シリーズ, 経済学, 1966年, 第4号, 17~25ページ])
- (3) К.マルクス「資本論」における信用研究の方法論 (Методология Исследования Кредита в «Капитале» К.Маркса, Там же, 1967年, No.4, стр.28~37 [同誌, 1967年, 第4号, 28~37ページ])

(第1論文)

К・マルクスの未完成研究プランについて

К・マルクスの方法論は、かれの理論的遺産のなかでもっとも重要な部分のひとつである。ここ数年のあいだわが国では、「資本論」の方法、とりわけ抽象から具体への上向方法にかんする一連の研究があらわれた(たとえば、А・А・ジノヴィエフ, Э・В・Ириенкоフ, М・М・ローゼンターリ, В・チプーヒンの諸著作〔訳註2〕)。これらの著書のなかでは、К・マルクスの「資本論」を材料として、抽象から具体への上向方法が考察されている。このこと〔「資本論」による上向法の研究〕が上向方法を研究するためのきわめて重要な側面をなしていることは、うたがいない。しかし、わたくしの意見では、それは唯一のやり方ではない。

マルクスがこの研究方法をつくりだしたのは、1843~59年、すなわち「資本論」の著述に直接とりかかるまえの期間においてであった。その結果、「経済学批判」への天才的序説が書かれることになった。1859年にエンゲルスは、1850年代末までにマルクスがなした仕事を評価して、つぎのように書いた。「マルクスの経済学批判の基礎をなしている方法の完成を、われわれは、その意義において唯物論的根本見解にほとんど劣らない成果であると考え⁽¹⁾」。上向方法がどのようにしてつくりだされたか、そしてそれがしあげられた段階——それは1857年~59年のマルクスの著述のなかに反映している——を研究することは、はなはだ重要なことである。

この論文の目的は、マルクスが「経済学批判」への「序説」および1858～59年の時期のいくつかの手紙においてプランの形であたえた資本主義理論の編別構成の若干の方法論的基礎を考察することである（わが国の文献では、このプランが6巻本プラン〔план шести книг〕とよばれている）⁽²⁾。

このプランをつぎにかかげよう：

第1巻 「資本について」

第1部

第1章 「商品」

第2章 「貨幣」

第3章 「資本一般」：1・資本の生産過程；2・資本の流通過程；3・資本の生産過程と流通過程との統一，あるいは資本と利潤（利子）

第2部 「諸資本の競争」

第3部 「信用」

第4部 「株式資本」

第2巻 「土地所有」

第3巻 「賃労働」

第4巻 「国家」

第5巻 「外国貿易」

第6巻 「世界市場」

このプランには研究対象の客観的な編別構成が反映している，すなわち資本主義的生産様式に内在する客観的連関の独特の形態が表現されている。

K・マルクスは、6巻本プランに立脚して「資本論」にたいするかれの直接的作業を開始した。かくしてこのプランは、抽象から具体への上向というマルクス主義的方法をしあげるにあたって重要な道標となるのである。

上向というマルクス主義的方法の研究にたいして発生学的に接近するためには、6巻本プランのなかでK・マルクスがあたえた資本主義経済学の対象の編別構成を分析する必要がある。残念ながら哲学者たちはこのプランを研究していないし、経済学者たちはそれを挙示するだけである。6巻本プランの方法論の分析が大きな学問的興味をそそることは、つぎのことからだけでもあきらかであろう。K・マルクスがこのプランを作成するにあたって「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である⁽³⁾」ということから出発

した。これと関連しておのずからつぎのような疑問が生じてくる。(1), なぜK・マルクスは、6巻本プランにしたがって、競争・信用・株式資本・土地所有・賃労働などとは別個に、資本の核心的構造の考察をはじめたのか？(2), マルクスは第1巻の第2～4部や第2～6巻のなかではどのような視角から競争・信用などを研究するつもりであったのか、そしてこの研究は資本の核心的構造の分析とどのように関連しているのか？これらの諸問題を解決しなければ、6巻本プランの根本的な方法論上の思想をあきらかにすることはできない。

ソヴェトの文献のなかには、K・マルクスは「資本論」の執筆過程で6巻本プランであたえられた資本主義の理論の編別構成を「資本論」にみられる編別構成によってとりかえた、という見解が存在している⁽⁴⁾。

マルクスにせよエンゲルスにせよ、「資本論」のプランが6巻本プランであたえられた資本主義理論の科学的編別構成にとってかわったものだ、ということについては、けっしてかたったことはない。したがって、D・ローゼンベルクがもちだした観点を証明するために、重みのある科学的論証が必要となるのは当然である。

D・ローゼンベルクの基本的な論拠は、つぎのようなものである。「以前にはマルクスは、自分の経済学上の見解を個々の独立論文の形で叙述しようとしていたのだが、これらの独立論文のうちのひとつが資本の分析にあてられ、他の独立論文は賃労働、土地所有、外国貿易、世界市場に、つまりブルジョア経済のさまざまな側面にあてられるように予定されていた。ところでこれらの独立論文全体は、ただひとつの思想および共通の革命的・批判的傾向によって統合されていた。だが、マルクスはここにとどまるわけにいなかった。ブルジョア経済の個々の側面の分析が深まるにつれて、マルクスは、これらのもろもろの側面はすべて資本の運動によって規定されていること、だからこれらの諸側面は資本のさまざまな発現形態の研究として考察されるべきだということに気づいたのである⁽⁵⁾」

このようにD・ローゼンベルクの意見によると、(1), マルクスは6巻本プランを作成したときにはまだ、資本主義経済のすべての側面が資本の運動によって規定されており〔これらの側面は〕資本の発現諸形態として考察されるべきである、ということを考えていなかったし、(2), 6巻本プランによってはそのような考察は保障されないし、(3), このプランを作成したのちになってはじめてK・マルクスは、資本主義経済のすべての側面

が資本の運動によって規定され、かつまた〔それらの側面は〕資本の発現諸形態として考察されるべきである、ということに気づいた、ということになる。これらの命題のひとつひとつは、それ自体として証明を必要とするのであるが、Ⅱ・ローゼンベルクはその証明をあたえてはいない。

かれ〔Ⅱ・ローゼンベルク〕によってもちだされた論拠は、もしマルクスの経済学研究がはじまったばかりの時期つまり客観的に存在する経済的カテゴリーの相互連関やこれらのカテゴリーと資本との一般的依存関係がかれにはまだ知られていなかった時期にK・マルクスが6巻本プランを作成したのだとすれば、いくらかの根拠をもちうるであろう。だが、K・マルクスが6巻本プランをつくりあげたのは1857～59年だったのではないのか、すなわち、かれが15年におよぶ研究の結果このような客観的相互連関を発見し、資本主義のすべての側面が資本の運動によって規定されているということがすでにかれにたいしてあきらかとなっていた当時ではなかったのか。マルクスはこのことを「序説」のなかではっきり指摘している。資本の視角からする競争・信用などの考察は、6巻本プランの主要鎖環たる「資本一般」の部にふくまれるべきである、と。しかもそれは、指摘されたとおり排除されなかったし、逆にこれらの経済的カテゴリー〔にかんする〕後続の特殊研究（6巻本プランの第1巻第2～4部および第2～6巻）を前提していたのである。

Ⅱ・ローゼンベルクはかれの研究のなかで、たとえばつぎのような問題、すなわち、なぜマルクスは6巻本プランを作成するさいに資本はブルジョア社会の支配的経済力であるということから出発して、競争・信用などを剰余価値理論と別個に研究することにしたのかという問題、を無視した。

かれ〔ローゼンベルク〕は、6巻本プランのなかには競争・信用などを2つの側面から考察する客観的必然性が反映していることを考慮にいれず、第1の主要な側面を唯一の側面とかがえて、それに全注意を集中した。その結果Ⅱ・ローゼンベルクは、「資本論」のなかでは競争・信用などが剰余価値の視角のもとで研究されているという事実から、マルクスは6巻本プランを「資本論」プランによってとりかえたという結論をひきだしたのである。

Ⅱ・ローゼンベルクは「K・マルクスの経済学説の発展にかんする問題によせて」という論文のなかで、6巻本プランと「資本論」プランとの連関にかんする自分の観点を根拠づける目的で、いまひとつの方法論上の論拠をもちだしている。かれはつぎのように書いている。「すでに第1分冊（1859年——A・コーガン）のなかでマルクスは、『現実的運動』

をしかるべき形で叙述しはじめた。この叙述は、もっとも単純なカテゴリー——フルジョア社会の「経済的細胞形態」としての商品がそのようなカテゴリーである——からいっそう複雑なもろもろのカテゴリーへの「上向」という形態をとらなければならず、とったのである。それによってマルクスは、予定されていた独立論文的性格の6巻本のかわりに総合的性格をもつ単一の一般化された巻本〔の著述〕を、その第1分冊をもって開始したのである⁽⁶⁾」

「序説」のなかの「経済学の方法」という分節は6巻本プランによってしめくくられているが、K・マルクスはこの節のなかで、抽象から具体への上向は真の科学的方法であり、「現実的運動」の叙述はこの方法にしたがっておこなわれるべきである、と指摘している。マルクスは、1858年2月22日づけラサールあての手紙のなかで6巻本プランを特徴づけ、多年にわたったかれの研究をこのプランにしたがって叙述し公刊するつもりである〔とのべている〕⁽⁷⁾。だから、抽象から具体への上向方法を引証したとしても、〔それをもって〕マルクスが6巻本プランを「資本論」プランによってとりかえたと結論するための理由とすることはできない。

Ⅱ・ローゼンベルクは「資本論」の研究にたいして大きな貢献をしたし、「資本論」にかんするかれの仕事はあまねく承認され、また当然の好評をばくした。だがこのことは、かれの個々の命題にたいする批判的態度を排除するものではない。それとともにうえにのべたことから、6巻本プランの方法論上の諸原則を分析することなしには6巻本プランと「資本論」との関連という問題を解決することができない、という結論がでてくる。つぎにこの問題の分析にうつろう。

資本主義経済のなかには、物質的世界の他のどのような部面ともおなじように、たがいに密接に連関しあい、こもごも相手を制約しあい、相互に他物へ移行しあうところの質的にことなる多くの運動形態が存在している。

エンゲルスが1890年10月27日づけK・シュミットあての手紙のなかであたえたつぎのような方法論上の指示は、資本主義経済のさまざまな運動形態のあいだの相互連関を理解するために大きな意義をもっている。「分業が社会的規模でおこなわれるところには、部分労働相互の独立化もあらわれます。生産は究極における決定者です。しかし、生産物の取引が本来の生産に対して独立化されるや、商業はそれ自身の運動をおこなうようになります。この運動は、全体としては生産の運動によって支配されるとはいえ、個別的には、ま

たこの一般的従属性の内部では、やはり、このあらたな要因の性質のうちに存する諸法則にしたがうもので、それ自身の諸段階をもち、それ自身ふたたび生産の運動に反射します。……

貨幣市場についてもおなじです。貨幣取引が商品取引から分離されるや、それはひとつの——生産および商品取引によって設けられた一定の諸条件のもとでの、またこの限界の内部での——特有な発展をもち、それ自身の性質によって規定された特殊な諸法則と独特な諸段階とをもつ⁽⁸⁾」

F・エンゲルスは、このように、生産と商業との連関を分析しつつ、もろもろの経済的カテゴリーのつぎのような相互依存関係をあきらかにしたのである。所与の生産様式のなかで決定的役割を演ずる経済的カテゴリーは、他の経済的カテゴリーの運動を支配する。だがこのことは、後者の相対的自立性を、〔すなわち〕支配的な経済的カテゴリーとの「一般的依存関係」のもとでおこなわれる他のカテゴリーの「固有の運動」を、排除するものではなく逆にそれを前提するのである。

エンゲルスのこの命題を具体化しつつ、資本主義の一般理論の編別構成の問題を考察するさいに考慮にいれなければならないのは、「人間の思惟は不断に、……いわば第1次の本質から第2次の本質へと、その他等々へと、かぎりなく深まっていく⁽⁹⁾」ということである。

ブルジョア社会の支配的経済力である資本は、その質的独自性において、すなわち剰余価値をになう価値として、競争・信用などの運動にたいして決定的影響をおよぼし、その本質（第1次の本質）および資本主義経済におけるその地位を規定するのである。だが剰余価値との一般的依存関係の内部でのこれらの経済的カテゴリーは、剰余価値から相対的に独立した固有の運動をもっており、資本主義経済の自立的で質的にあたらしい諸形態——これらの諸形態にとっては剰余価値から相対的に独立したそれ自身の諸法則が固有である——としてあらわれる。競争・信用などにたいする資本の規定的影響といえども、これらの諸法則の質的独自性を無に帰することはできない。

6巻本プランの主要な環は、「資本一般」の部である。マルクスは、「資本一般」という経済的カテゴリーの内容を、1857～58年のノートの中なかであきらかにしている。かれはつぎのように書いた。「……資本一般〔das Kapital im Allgemeinen〕は、……恣意的抽象ではなくて、他のあらゆる富の形態——ないしは生産（社会的）が展開されるもろもろの様式——から区別された資本の種差（differentia specifica）を把握する抽象であ

る。そのものとしての各種資本に共通し、またそれぞれの一定の価値額を資本にするものは、こうした諸規定である⁽⁴⁾」

マルクスはさらに、資本一般が特殊的諸資本とはことなる現実的実存をもっていることを強調した。資本一般の現実的実存は、それがすべての特殊的諸資本の^{エレメンタール}要素的な基礎となっている点にあらわれる。

資本の独自の・差別的特徴は、資本とは賃労働の搾取の結果として剰余価値をになうにいたった価値である、という点にある。うゑに引用したマルクスの命題から当然でてくることは、「資本一般」という経済的カテゴリーはほかでもない資本のこの特徴をこそ表現している、ということである。

マルクスは資本一般の研究を抽象から具体への上向の道にしたがっておこなった。第1部の第1、第2章では、資本一般が萌芽的・要素的形態において研究され、第3章では発展した形態において研究された。第3章は3つの部分に分割された。第1部分（「資本の生産過程」）では剰余価値の生産が研究され、第2部分（「資本の流過程」）では剰余価値の流通が研究され、第3部分（「資本の生産と流通の統一あるいは資本と利潤（利子）」）では生産と流通との統一において考察された資本の運動から生ずる剰余価値の諸形態が研究されている。このように、第3章では資本の核心的構造が解明されたのであり、剰余価値の理論がしあげられたのである。

剰余価値の理論は、競争・信用などの（一定の視角からの）分析をふくんでいる。たとえば、賃労働の研究なしには剰余価値生産の過程を科学的に研究できないし、競争の研究なしには平均利潤のような剰余価値の転化形態を科学的に研究することができない。剰余価値理論のしあげの途上で競争・信用などを研究する必要があるのは、現象の偽瞞的外観がこれらの経済的カテゴリー〔競争・信用など〕との関係において剰余価値の決定的役割をおおいかくしてしまうという事情にもよるのである。

「資本一般」の部では、競争・信用などと資本との一般的依存関係〔および〕これらの〔競争・信用などの〕本質と資本主義経済における地位とが、剰余価値理論の枠内で解明されているのである。

しかし、競争・信用などはまた、剰余価値から相対的に独立した運動でもある。このような運動の発現のいくつかを指摘しよう。競争（独占価格、競争戦の諸方法）；信用（抵当信用、消費者信用）；株式資本（株式の諸種目、創業利得）；土地所有（商取引される土地の増大の各種形態、農民分解の独自の特徴）；賃労働（プロレタリアートの状態にた

いする直接税と間接税の影響) ; 国家 (資本主義的国家所有の特質, 国家予算) ; 外国貿易 (資本主義的再生産にたいする外国貿易の影響, 不等価交換) ; 世界市場 (国際分業, 世界市場における価格形成の特殊性) 。

資本の核心的構造を研究するさいの科学的抽象とは, 資本の核心的構造とむすびについているもののすべてを一般化し, またそれと直接むすびついていないものをすべてとりのぞく, ということである。このことに対応して, 資本の核心的構造を分析するさいには, 競争・信用などと剰余価値との有機的連関をあきらかにし, それらと資本との一般的相互関係をしめすことが必要であり, 同時にまた剰余価値から相対的に独立したこれらの経済的カテゴリーの運動の考察を捨象することが必要である。私のみるところでは, つぎのようなレーニンの方法論的指示をおもいおこすのが適當である。「なんらかの複雑な, 錯雑した社会=経済問題を解決するときには, 初歩的な原則として, まずはじめに, 事態を複雑にするいっさいの副次的な影響や事情からもっともまぬかれている, もっとも典型的なばあいを取りあげ, それを解決してからはじめてさきにすすんで, 事態を複雑にするこれらの副次的な事情をつぎつぎに考慮にいれていくことが必要である⁽⁴⁾」

資本の核心的構造を研究するさいには, 剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動の特性は, 「事態を複雑にする副次的な事情」としてあらわれるのであって, これは捨象する必要がある*。資本の核心的構造がより深くより広く研究されればそれだけこの研究はより複雑でより困難なものとなり, 弁証法的方法とそこから生ずるこうした抽象への必要はいよいよもって大きな意義を獲得する。資本の核心的構造を分析したのちには, 理論的土台としてのそれに依拠しつつ, 剰余価値から相対的に独立した競争・信用などの運動を独自に研究しなければならない, すなわち第1次的本質から第2次的本質等々へとすすまなければならない。

* この命題を確証する例をあげよう。剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争の運動——それは需要の弾力性にたいする商品の使用価値の影響のうちにあられる——が剰余価値理論のしあげのさいに分析されないとしても, このことは剰余価値の研究をさまたげないだけでなく, むしろそれをたすけるのである。〔すなわちこのことは〕ブルジョア社会のすべての搾取階級と搾取グループの富が労働者の不払労働によって作りだされることの証明をさまたげないばかりか, 逆にそれをたすけるのである。この問題の分析を剰余価値理論のうちにふくめるならば, それこそ剰余価値理論の研究はさまたげられることになり, そのばあいには, マルクスの言葉をつかえば, 「科

学以前に科学をあたえ」なければならなくなる。

うえにのべたことからひきだされる結論は、資本の核心的構造と競争・信用・株式資本・土地所有・賃労働などのように剰余価値から相対的に独立しておこなわれる運動とを別々に考察する客観的必然性が存在する、ということである。この客観的必然性が6巻本プランのなかであたえられた資本主義の一般理論の編別構成をも規定したのである。このことに関連して、1857～1858年の草稿のなかでマルクスが、6巻本プランの「土地所有」の巻から「賃労働」の巻への移行の弁証法をあきらかにしつつ、「……いまや賃労働は、資本に対立して自立的なものとして考察されねばならない⁽⁴⁹⁾」と書いたことを想起しよう。この1句でマルクスが強調したのは、「賃労働」の巻では資本にたいして賃労働がもっているところの相対的独立性を考察する必要がある、ということである。

うえにのべたことから結論できることは、競争・信用などの分析は2つの側面^{アスペクト}からおこなうべきであるということ、すなわち、はじめにこれらの経済的カテゴリーにたいする剰余価値の影響が解明されるべきであり、しかるのちに剰余価値から相対的に独立しておこなわれるこれらのカテゴリーの運動が研究されるべきだ、ということである。

第1の側面は、競争・信用などの認識にとって決定的意義をもっている。だがこのことが第2の側面を過少評価させることになってはならない。「資本論」のなかでマルクスが、賃労働や競争を剰余価値から相対的に独立させて研究することについてのべたさいに、「特殊理論 (die spezielle Lehre)⁽⁵⁰⁾」とか「理論 (die Lehre)⁽⁵¹⁾」とかの用語をもちいたのは示唆的である。

マルクスのこうした定義の意味と原理的意義を解明してみよう。まず想起されるのは、諸科学のマルクスの分類の観点からみると、物質のあれこれの運動形態の相対的自立性ないし孤立性が特殊科学ないし特殊理論の必要をうみだすということである。剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動は、主としてこれらの経済的カテゴリーの作用機構や現象形態にとっては、これらのカテゴリー自体の本性によって規定される独自の法則が固有のものである。したがって、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動の研究は、たんにそれ自身の問題領域^{プロブレマチカ}をもっているばかりでなく、それ自身の論理ももっている。すべてこのことが、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争、信用などの運動は特殊理論の対象である、とかんがえる根拠をあたえるのである。

うえにのべたことは、6巻本プランの根本的な方法論上の思想——この思想が6巻本プ

ランのなかであたえられた資本主義理論の編別構成を規定している——を定式化する可能性をあたえている。「資本一般」の部における資本の核心的構造の分析にさいしては、競争・信用などをふくむ資本主義経済の諸現象の全多様性がただ剰余価値の生産と取得という視角のもとでのみ考察されている。剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動は、資本の核心的構造の分析とは別個に、またこの分析にもとずいて、研究されるべきである。すなわち、これらの経済的カテゴリーにかんする特殊理論は、この分析とは別個に、またこの分析にもとずいて、しあげられなければならない。

うえにのべたことはまた、剰余価値の理論（資本一般の理論）と競争・信用などにかんする特殊理論との分界の一般的標識をもはっきりさせる。

剰余価値の理論における主要な研究対象は資本の核心的構造であり、その最終目的は資本主義の経済的運動法則の解明である。この理論のなかでは競争・信用などは剰余価値の視角から考察される部分的問題であり、そしてそこではこれらの経済的カテゴリーと資本との一般的依存関係が解明され、資本主義経済におけるそれらの本質（第 1 次的本質）と地位とが解明される。だが競争・信用などの作用機構や発現形態はただついでにふれられるだけである。競争・信用などの研究の論理は、剰余価値の質的独自性によって規定されている。

剰余価値理論と特殊的諸理論とのあいだの境界ははなはだ相対的なものであるが、研究対象そのものがたがいにからみあっているのであるからこれは当然のことである。剰余価値の理論と特殊的諸理論とのあいだにはっきりした境界がないために、両者の分界づけが困難となり、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる一連の経済的カテゴリーの運動の質的独自性がぼかされてしまうのであるが、このことがこんどはこれらのカテゴリーの研究にたいする機械的態度をうみだすことにもなるのである。そうであればあるだけ 6 巻本プランのなかであたえられた資本主義理論の編別構成——この編別構成のなかで剰余価値理論の分界づけがなされている——は重要なのである。

競争・信用などの分析にたいする二段がまえの態度は、科学的認識の一般的合則性からでてくる*。

* 「発展の原理からみるならば、どんな対象でも、すくなくとも諸科学の全隊列のなかで隣接する 2 つの科学によって研究することができる^④」

剰余価値理論と特殊的諸理論とを別個にしあげることは、両者のあいだの有機的連関を排除しないばかりでなく、かえってそれを前提とするのである。この点をさらにくわしく

のべよう。

特殊的諸理論が剰余価値理論から〔出発して〕おこなわれなければならないのは、その研究対象の運動が剰余価値との一般的依存関係の枠内で実現されるからである。

それとともに、特殊的諸理論によって研究される競争・信用などの運動は、剰余価値の法則性を変容させたり変形させたりするのであり、資本主義経済における剰余価値の決定的役割の実現を媒介するメカニズムとなるのである。したがって、もろもろの特殊理論は、剰余価値理論のきわめて重要な具体化なのである。

この具体化の性格を多くの点で規定しているのは、つぎのことである。よく知られているように、一般法則といっそう発展した諸関係とのあいだには、たんに統一ばかりでなく矛盾も存在している⁽⁴⁵⁾。だから、剰余価値理論のうちに反映される法則性の総体と剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動の影響のもとで生ずるこの法則性の変容とのあいだにも、もろもろの矛盾が存在するのである。これらの諸矛盾は、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動の特質からうまれるのであり、したがって剰余価値理論のなかで解決されるわけにいかないのである。これらの諸矛盾を解決するためには、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動の特質を分析する必要がある。

1例をあげよう。K・マルクスは「資本論」のなかで剰余価値理論をしあげるさいに、市場価値が低下すると商品にたいする有効需要と商品の実現〔量〕とが増大することをしめした⁽⁴⁶⁾。剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争の運動は、このような法則的連関を変容させ、一定の条件のもとで商品の市場価値の低落がこの商品にたいする需要の減退および実現〔量〕の減少をひきおこす、という結果をもたらす*。このばあいには、市場の具体的条件が剰余価値理論の合則性のひとつと矛盾におちいつているのである。競争にかんする特殊理論は、この矛盾を解決するものでなければならない。

* 商品にたいする需要は有効需要（この需要は決定的役割を演ずるものであり、また剰余価値と直接むすびついている）によって規定されているだけでなく、文化水準、国民的伝統、流行など（これらのものは、剰余価値から相対的に独立している）のようなもろもろの社会的要因によっても規定されている。篩^{ふるい}の市場価値が低下する以前に篩にたいする需要が充足されていたならば、市場価値の低下とそれに応ずる市場価格の低下によって篩にたいする需要の増加がひきおこされることはない。そのう

え、購買者は、節を手にいれるためにより少ない貨幣を支払うのであるから、節のかわりに流行の毛織物をより多く手にいれる追加的可能性をうけとることになる。その結果、節にたいする需要は減退し、節の実現〔量〕は減少する。

マルクス主義的な弁証法的方法からみるならば、一般的諸法則といっそう発展した具体的諸関係とのあいだの諸矛盾は、これらの具体的諸関係の特質を反映し第2次的本質等々をあきらかにするようなあたらしい諸概念、あたらしい科学的諸法則にたすけられて、解決される。したがって、特殊的諸理論は、あたらしい諸命題によって科学をゆたかにしなければならぬし、剰余価値理論と資本主義経済の具体的諸過程とのあいだに発生するもろもろの矛盾を解決しなければならない。

特殊的諸理論のなかで実現される剰余価値理論の具体化の重要な方向のひとつとなっているのは、剰余価値分配の転化形態の分析である。剰余価値の諸形態は、主として、また基本的には、剰余価値生産過程の特質によって制約されているし、また剰余価値の諸形態はそのようなものとしては剰余価値理論の枠内で考察されている。しかしこれらの諸形態にたいしては、剰余価値の生産とは直接むすびついていない多くの要因もまた影響するのである。たとえば、剰余価値の転化形態である利潤の大きさは、最小の費用で生産をおこなう資本家たちの手腕とか市場の景況などにも依存している、つまり資本家たちが競争戦をどうたたかうかにも依存しているのである。

「剰余価値学説史」第Ⅱ部のなかでマルクスはつぎのように書いている。「一般的利潤率が問題となっているばあいには、資本家たちがかれらのあいだで競争したり相互にだましあうようなたぐいの苦労はまったく考慮にはいらぬ。ここではまた、ひとりの資本主義的企業家が自分の労働者から最小の費用で最大の剰余労働量をしぼりとることができたり、このしぼりとした剰余労働を流通過程で実現できるというような手腕を他の資本主義的企業家よりも多くもっているか少なくとももっているかという問題も、おなじように考慮にはいらぬ⁽⁴⁾」。ここからわかることは、剰余価値理論のなかでは利潤の分析が完結していないということであり、利潤のうち剰余価値の起源およびその総規模と直接むすびついていない部分の分配という問題は競争にかんする特殊理論のなかで剰余価値理論とは別個に考察されるべきだということである。

貸付利子の研究にたいするマルクスの態度も、多くの点で、これと似ている。貸付利子の運動は、貸付利子の源泉である剰余価値（利潤）の運動によって規定されているだけでなく、信用制度によっても規定されている。現実資本の蓄積が変化せず、したがっ

てまた利潤率が不変のままとしても信用制度そのものが貸付資本の蓄積をいちじるしく増大させることができるし、その結果利子率が低下する。貸付資本の運動は、それが信用制度の影響をうけるかぎりでは、剰余価値の生産諸条件とは直接むすびついていないところの剰余価値分配なのである。したがって、貸付資本のこのような分析は剰余価値理論の枠外にあるのであり、信用にかんする特殊理論の対象なのである。

内容と形式との弁証法という点からみるならば、利潤や貸付利子の研究にたいするこのような態度は、つぎのことを〔意味する〕。剰余価値理論のなかでは、利潤と貸付利子（形式）が剰余価値（内容）の視角から考察されている。そのさい、剰余価値にたいする利潤や貸付利子の相対的独立性の研究もおこなわれているが、しかしこの相対的独立性が剰余価値（内容）の生産そのものによってうみだされるかぎりにおいてのみである*。ところで競争や信用にかんする特殊理論のなかでは、利潤や貸付利子の相対的独立性にたいしてとくべつの注意がむけられる、すなわちもろもろの形態の分析が前景におしだされるのである。〔問題にたいする〕このような態度のおかげで、剰余価値の内容と形式の全面的で深い分析が達成されることになる。

* たとえば、平均からはずれた有機的資本構成をもつ資本主義的諸企業の手にはいる平均利潤は、これらの企業がつくりだす剰余価値とは量的に一致しない。平均利潤のこのような相対的独立性は、マルクスの指摘したように、つまりところ剰余価値の生産そのものの特殊性によってうみだされるのであり、それゆえに剰余価値理論の枠内で考察されなければならないのである。

剰余価値理論と特殊諸理論とは相互に滲透しあうが、そのさいそれぞれの自立性は保持されている。剰余価値理論の諸命題は、出発点としても、のちの研究のための素材としても、特殊諸理論のなかにはいりこむ。特殊諸理論は、剰余価値理論によって研究される諸法則とともに発生するもろもろの変形を独自の諸概念のなかで解明し、それによって資本の内容と資本主義経済における資本の決定的役割をいっそう完全にあきらかにする。マルクスが「序説」のなかで6巻本プランを基礎づけたさいに、ブルジョア社会の全経済力の支配者である資本は「出発点にも終点にもならなければならない⁽⁹⁾」とのべたのは、あきらかにうえにのべた理由からである。

6巻本プランの方法論のこの側面は、他の諸側面とおなじように、科学的認識の一般的法則性によって規定されている。これに関連して想起されるのは、諸科学の分類は「……相対的に閉鎖された発展周期の形成を許容するが、そのとき発展の結果、よりいっそう高

い基礎のうえで発展の端初に到達し、一種独特の『環』が発生する⁹⁹⁾』ということである。

うえにのべたすべてのことから結論としてでてくるのは、剰余価値理論と特殊的諸理論とは抽象から具体へと上向するひとつつながりの鎖の環として相互に有機的にむすびつけられている、ということである。

6巻本プランのなかであたえられた資本主義理論の編別構成が抽象から具体への上向というマルクス主義的方法にとって固有のものであるという事実は、われわれがマルクスの方法をリカードの方法と比較してみるとときに明瞭なものとなる。

リカード理論の出発点（価値量が労働時間によって規定される）と資本主義の具体的諸過程とのあいだには、理論上の中間的鎖環がおかれている。それら〔中間の環〕の数にかぎりが無いのは、理論的認識過程にかぎりが無いのとおなじである。ところがリカードおよびとくにリカードの独断的弁護人たちは、こうした中間の環をみのがし、資本主義経済の具体的諸過程を労働時間による価値量の決定という抽象的命題に無媒介に適合させようとつとめた。マルクスは、このような方法を批判したさい、それが理論の基礎そのものをくつがえしてしまうことをしめした。「一般的法則といっそう発展した具体的諸関係との矛盾は、ここでは中間の環を発見することによって解決されるべきものではなく、具体的なものを抽象的なもののもとに直接ふくみこんだり具体的なものを抽象的なものに無媒介に適合させたりすることによって解決されるべきものとされている。しかもこれは、言葉のうえでのフィクションによって、事物の正当な名称を変更することによって、達せられるべきものとされている。（なるほどわれわれのまえには「言葉のうえでの論争」があるが、しかしこれは「言葉のうえでの」論争である。というのは実在的に解決されない実在的諸矛盾が、ここでは空文句によって解決されようとしているからである）……こうしたやり方は、……反対者たちのいっさいの攻撃よりもはるかに大きくリカード理論の全土台を崩壊せしめたのである……¹⁰⁰⁾」

リカードやかれの独断的弁護人たちとちがって、マルクスは、剰余価値理論をしあげるさいに、抽象から具体へと上向してゆき、それに対応して価値と資本主義経済の具体的諸過程とのあいだの数多くの理論上の中間の環——たとえば、商品に体化された労働の二重性格、独特の商品としての労働力、不変資本と可変資本、資本の有機的構成、生産価格などのような環——を発見した。その結果、マルクスの価値と剰余価値の理論は、資本主義経済の根本的法則性を適合的に反映するものとなり、リカードとかれの弁護人たちがま

よいこんだ諸矛盾を解決したのである。

しかしマルクスは、6巻本プランのなかで資本主義の一般理論の科学的編別構成をあたえたさいに、上向の鎖を剰余価値理論の諸段階にだけ限局することができなかった。かれは、リカードとちがって、抽象から具体への上向過程はつきるところがない、ということから出発していた。マルクスは、6巻本プラン作成にさきだっておこなわれた多年にわたる資本主義経済の研究の途上で、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる競争・信用などの運動が存在しており、この運動は剰余価値理論のあとにつづく上向段階ではじめて認識できる、ということをあきらかにしていた。したがってマルクスがこれらの諸段階を6巻本プランのうちにふくめたのは当然であった。

マルクスは、1857～1859年に、剰余価値と競争・信用などにかんする特殊的諸理論とは別々に研究する必要があるという方法論上の思想を提起したのであるが、この時期にはまだこの思想を個々の問題について完全に具体化してはいなかった。すなわちかれは1857～1859年にはまだ、競争・信用などの問題が資本一般の分析のさいにはどのように考察されるのか、また特殊的諸理論のなかではどのように考察されるのか、という問題を完全には解決していなかった。6巻本プランのこの根本的な方法論上の思想を個々の問題について具体化することは、1857～1859年ののちにもつづけられた。このようにK・マルクスは、6巻本プランの根本的な方法論上の思想にみちびかれながら、プランそのものを改善しつづけたのである*。

* マルクスが、「資本論」のなかで6巻本プランの方法論上の根本思想をどのように実現したかという問題には大いに興味をそそられるが、しかしこの問題を分析するためにはすくなくとも大きな専門的論文が要求される。この問題の若干の側面は、《Экономические науки》, 1966, No. 2, 《Вестник Московского Университета》 Экономика, 1966, No. 4 и 1967, No. 4 [「経済科学」, 1966年, 2号, 「モスクワ大学通報」(経済学), 1966年, 4号, 1967年, 4号] 誌上で発表された筆者の諸論文で考察されている。

6巻本プランの根本的な方法論上の思想は、「資本論」の構造分析をさらにすすめてゆくという点からみても、また「資本論」のなかですえられたのちの研究のための出発点をあきらかにするという点からみても、大きな意義をもっている。ここではほんの1例だけにかぎってのべよう。

マルクスは、「資本論」第1巻の第18章でつぎのように指摘している。「労賃はそれ自体また非常にさまざまな形態をとるのであるが、……とはいえ、このような形態のすべてについてのべることは、賃労働の特殊理論にぞくすることであり、したがって本書の任務ではない⁽¹⁾」。賃労働の搾取の分析は「資本論」全巻とくにその第1巻を赤い糸のごとくつらぬいているにもかかわらず、賃労働にかんする特殊理論は、マルクスの言葉によると、「資本論」のなかではあたえられていない。6巻本プランの根本的な方法論上の思想は、この外見上の矛盾をたやすく解決してくれる。すなわち、「資本論」のなかでは賃労働は剰余価値の唯一の源泉として研究され、賃労働の第1次的本質、資本と賃労働との一般的依存関係が解明されている。しかし賃労働は剰余価値から相対的に独立した運動もおこなうのであって、この運動は賃労働にかんする特殊理論の対象なのである。この研究の問題領域の解明としあげとは、マルクス主義者の重要な課題である。

6巻本プランの意義はまたつぎのことによっても、すなわち、マルクスが諸科学分類の〔ための〕一般方法論的原則を資本主義経済理論の編別構成に適用したのがまさにこのプランにおいてであったということによっても、規定されている。したがってこのプランの研究は、諸科学の分類にたいするK・マルクスの態度をいっそう深くまたいっそう完全に解明する可能性をあたえるのである。

- (1) Marx-Engels, Werke, Bd.13, S.474 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 大月書店, 第13巻, 477ページ]。
- (2) Vgl. Ibid. Bd.13, S. 7, 639, См. К.Маркс и Ф.Энгельс, Соч., т.29, стр.254, 449, 451, 468 [邦訳, 同, 第12巻, 5ページ, 635ページ, マルクスエンゲルス, 「資本論にかんする手紙」, 法政大学出版局, 1954年, 上, 85ページ, 76~77ページ, 84ページ, 95~97ページ, 参照]。
- (3) Ibid. Bd.13, S.638 [邦訳, 同, 第13巻, 634ページ]。
- (4) См. Д.Розенберг. История «Капитала» К.Маркса, «Вестник АН СССР», 1942, No. No. 9~10; К вопросу о развитии экономического учения К.Маркса, «Ученые Записки МГУ», Вып. 123. «Политическая Экономия», 1947г. [Д.ローゼンベルク, 「K・マルクス『資本論』の歴史」(ソ連邦科学アカデミー通報, 1942年, 9~10号), 「K・マルクスの経済学説の発展をめぐる問題によせて」(モスクワ大学紀要, 第123集, 「経済学」, 1947年) を参照せよ]。
- (5) «Вестник АН СССР», 1942г. No.No. 9~10, стр.16. [ソ連邦科学アカデミー通報, 1942年, 第9~10号, 16ページ]。
- (6) «Ученые записки МГУ», вып.123, 1947г. стр.274. [モスクワ大学紀要,

第123集, 1947年, 274ページ]。

- (7) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.29, S.551 [邦訳, マルクス/エンゲルス, 「資本論にかんする手紙」前出, 上, 1954年, 76~77ページ, 参照]
- (8) К.Маркс и ф. Енгельс, Соч., т.37, стр.415~416, [邦訳, 同, 下, 1955年, 371~372ページ]。
- (9) В.И.Ленин, Полн. собр. Соч., т.29, стр.227. [邦訳, 「レーニン全集」, 大月書店, 第38巻, 220ページ]。
- (10) К.Маркс, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, 1857~1858, s.353. [邦訳, マルクス「経済学批判要綱」, II, 大月書店, 384ページ]。
- (11) В.И.Ленин. собр. Соч., т.6, стр.328, [邦訳, 「レーニン全集」, 前出, 第6巻, 124~125ページ]。
- (12) К.Маркс, Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie, 1857~1858, s.190. [邦訳, 「経済学批判要綱」, II, 前出, 201ページ]。
- (13) Marx-Engels, Werke, Bd.23, s.565; Bd25, s.772. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 704ページ, 第25巻, 981ページ]。
- (14) Б.М.Кедров, Классификация наук, кн. 2, 1965г, стр.475. [Б.М.Кедров, 諸科学の分類, 1965年, 475ページ]。
- (15) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.26, Teil 3, ss.83~84. [邦訳, 「剰余価値学説史」, 第3巻, 改造社, 1929年, 109ページ, 参照]
- (16) Vgl. Ibid. Bd 25, s, 190. [邦訳「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 228ページ参照]。
- (17) Ibid. Bd.26, Teil 3, s.351. [邦訳, 「剰余価値学説史」, 第3巻, 前出, 712ページ]
- (18) Ibid. Bd.13, s.638. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第13巻, 634ページ]。
- (19) Б.М.Кедров, Классификация Наук., кн. 1, 1961, стр.247. [Б.М.Кедров, 諸科学の分類, 247ページ]。
- (20) Marx-Engels, Werke, Bd.26, Teil 3, ss.83~84. [邦訳, 「剰余価値学説史」, 第3巻, 前出, 109ページ]。
- (21) Ibid. Bd.23, s.565. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 704ページ]。

(第 2 論文)

K. マルクス「資本論」における価格理論

価格形成は、わが国の経済科学のなかでは十分にしあげられておらず、またいちばん論争の多い問題のひとつである。価格形成をめぐって展開された理論的討論の過程で、マルクス主義的な価格形成理論とりわけその方法論的側面をいっそう発展させる必要があるという意見がのべられている⁽¹⁾。このような態度はマルクス主義理論の本質にふさわしいものである。F・エンゲルスはつぎのようにのべている。「マルクスの世界観〔Aufassungsweise〕——これは教条ではなく方法である。それは、できあがった教義をあたえるのではなく、将来の研究のための方法をあたえるのである⁽²⁾」

マルクス主義的価格形成理論をいっそう発展させるためには、つぎの問題、すなわち、K・マルクスが「資本論」のなかで価格形成を分析したさいには抽象から具体への上向のいかなる段階にあったのか？ という問題を解決することがきわめて重要である。この問題にたいする解答は、マルクス主義的価格形成理論のこんごの発展方向をきめる可能性をあたえる。この問題を解決するうえでとくに興味をひくのは、「資本論」第 3 巻第 10 章である（「競争による一般的利潤率の均等化・市場価格と市場価値〔超過利潤〕」）。そこでは価格形成の過程が「資本論」第 3 巻の他の諸章よりもずっとくわしく考察されている。価格形成の根本的でもっとも重要な法則性の分析という点からみると、第 10 章は「資本論」のなかでの抽象から具体への上向の最終段階をなしており、そこでは価格形成の法則性が競争——これは価格形成の法則性にたいして本質的影響をおよぼす——との有機的連関のなかで考察されている。

この論文の課題は、「資本論」第 3 巻第 10 章において価格形成にたいする部門内競争の影響を研究したさいにマルクスは抽象から具体への上向のいかなる段階にあったのか、またこの問題をこんご理論的に研究するための「出発点」はいかなるものか、ということを知りたいとする点にある。

予備的注意からはじめよう。「資本論」、とくにその第 3 巻のなかには、数多くのマルクスの指示、すなわちかれは自分の著書のなかで、資本の核心的構造の分析と直接むすびついていないような競争の側面を考察からとりのぞき、〔それを〕競争の特殊的研究あるいは競争にかんする特殊理論にふくめるといふ指示が存在している⁽³⁾。

「資本論」第 3 巻第 14 章で利潤率の低下傾向に反作用する要因としての労働力の価値以

下への労賃の低下を特徴づけたさいに、マルクスは、つぎのように強調した。「これはここではただ経験的事実としてあげておくだけである。なぜならば、それは、じっさい、ここにあげてよいかもしれない他のいくつかのことと同様に、資本の一般的分析には関係のないもので、この著作では取り扱われない競争の叙述に入れるべきことだからである⁽⁴⁾」(傍点は私のもの——A・コーガン)。

「資本論」第3巻第45章でマルクスはつぎのように指摘した。「商品の生産価格によっても価値によっても規定されないで、買い手の欲望と支払能力とによって規定されている⁽⁵⁾」独占価格の考察は、「市場価格の現実の運動を研究する競争論にぞくすることである⁽⁵⁾」。この指示がとりわけ重要であるのは、このなかでマルクスが、競争にかんする〔特殊〕理論のなかで価格形成の理論的考察をつづける必要があるということ、つまり独占価格をふくむ市場価格の現実的運動を研究する必要があるということ、にとくに注意しているからである。

「資本論」第3巻の末尾の第7篇のなかでマルクスは、つぎのように注意している。「生産諸関係の物化の説明や生産当事者たちにたいする生産諸関係の独立化の説明では、われわれは、もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌との交替をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らが無意志的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう仕方には立ち入らない。なぜ立ち入らないかと言え、競争の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義生産様式の内的編制を、いわばその理想的平均において、示しさえすればよいのだからである⁽⁶⁾」(傍点は私のもの——A・コーガン)。

うえに引用したマルクスの言葉と関連して、マルクスが部門内競争を特殊理論からぬきだしたことが「資本論」第3巻第10章における価格形成の分析のうえにどのように影響したかを解明する必要がある。

「資本論」第3巻第9章のなかでマルクスは、資本主義経済が資本家たちのあいだでの剰余価値の再分配を条件づけており、この再分配は利潤率の一般的利潤率への均等化のうちに表現される、ということをしめした。このことから、商品の価格が価値をめぐる動揺するのではなく、生産価格をめぐる動揺するのだ、ということがひきだされている。この結論に関連して、K・マルクスが指摘したように、「このような利潤の一般的利潤率への均等化」⁽⁷⁾は「明らかに結果であって、出発点ではありえないから」⁽⁷⁾、「この均等

化」⁽⁷⁾が「どのようにして行なわれるか」⁽⁷⁾という「困難な問題」⁽⁷⁾が生ずる。

この問題は第10章で解決されているのであるが、そこでマルクスは、一般的利潤率の形成ならびにそれとむすびついている生産価格をめぐる商品価格の動揺はたんに価値法則を破壊しないだけでなく、逆に価値法則の基礎上でおこなわれるということのをのべている。この命題の基礎づけは、資本の核心的構造の研究にとって必要であり、剰余価値理論のしあげのために必要であり、そしてまた、一般的利潤率と価値法則との矛盾を解決することができずに崩壊してしまった古典派経済学を批判するために必要であった。それゆえにマルクスは、利潤の一般的利潤率への均等化が競争をつうじてどのようにおこなわれるかという問題を考察したさいに、主たる注意をつぎのような諸命題の証明にふりむけたのである。(1) 市場価格の市場価値からの不断の乖離はほんらい価値法則から生ずるのであって、価値法則と矛盾するものではない。(2) 「商品が単純に商品として交換されないで、資本の生産物として交換される」^{〔訳注3〕}資本主義のもとでは、価値法則の作用は、ひとしい資本はひとしい利潤をうみ生産価格が価格変動の中心となるように商品の価格をその価値から乖離させる、という結果が生ずるのはさけられない。

われわれは、第10章における部門内競争と価格形成との関係の研究が自己目的ではなく〔前述の〕第1命題の基礎づけに従属していることをしめし、またK・マルクスのこうした態度が価格形成の分析にたいしてどのように影響したかを考察してみよう。

K・マルクスは、第10章の第1命題を基礎づけたさいに、発達した資本主義生産の諸条件にあてはめて価値の理論を（「資本論」第1巻の第1篇にくらべて）よりいっそう発展させた。発達した資本主義生産は、各生産部門の内部のさまざまな技術的条件を前提しており、したがってまた同種商品の多様な個別価値を前提している。しかし、所与の商品の社会的価値を規定するのはこれらの個別価値なのである。「……ある特殊の生産部面の各々々の商品の価値は、この特殊な社会的生産部面の商品総量が必要とする社会的労働時間の総量によって規定されるのであって、それは、個々の商品の個別価値、すなわち個々の商品がその特殊の生産者および売り手に費やさせた労働時間、によって規定されるのではない⁽⁸⁾」

マルクスは第10章のなかで、発達した資本主義生産にあてはめて価値の量的規定を具体化しつつ、社会的価値つまり市場価値を基礎づけるさいの部門内競争の役割をつぎのようにあきらかにしている。「競争がさしあたりまずあるひとつの部面でなしとげることが、諸商品の種々の個別的価値から同じ市場価値と市場価格とを成立させることである⁽⁹⁾」。

K・マルクスは、おなじ市場価値の成立の問題を研究したさいに、つぎの3つのばあいを考察している。〔1〕、大部分の商品がほぼひとしい標準的な社会的条件のもとで生産され、劣悪な条件と優良な条件のもとで生産される商品が相互に調整される。〔2〕 大部分の商品が劣悪な条件のもとで生産される。〔3〕 大部分の商品が優良な条件のもとで生産される。マルクスは、これら3つのばあいについて（それぞれのばあいについて）ひとしい市場価値が価値法則にしたがって成立することをしめし、この過程における競争の役割を解明したのである。

単一の全体としての各生産部門の存在、したがってまた市場価値の存在は、当該部門の資本家たちのあいだの密接な連関によって制約されている。この連関は激烈な競争戦のなかにあられる。かくして部門内競争は、単一の市場価値が成立するための必要な前提なのである。競争はまた、部門内の平均的企業と劣等企業と優等企業とのあいだの相互関係を変化せしめ、それによって市場価値の変動をうながす⁽⁴⁾。部門内競争の圧力のもとで変化させられた市場価値が刺戟となって逆に競争戦が激化させられるのは、あたらしい条件のもとである企業は十分の利潤をうけとるのに他の企業は平均的利潤もうけとることができないか、あるいは費用価格さえ補填することができないからである。激化した競争は、企業間の相互関係を変化させることによって、市場価値に反作用をおよぼす等々……。

第10章でマルクスが主要な問題としたのは、市場価値にたいする部門内競争の具体的な形態の影響を解明することではなく、部門内競争の圧力のもとで形成される当該各部門の各種企業グループ間の相互関係がいかにして単一の市場価値を規定するかということであった。この点で、マルクスが単一市場価値の形成過程の分析をおわるさいにこの分析の抽象的性格を指摘したことは、意味深長である⁽⁴⁾。

マルクスは、当該商品種類にたいする単一市場価値の形成にかんする問題を研究したさいに、市場価格と市場価値との一般的依存関係をあきらかにし、市場価値は市場価格にたいして決定的影響をおよぼすこと、そして価格にたいする部門内競争の影響は従属的性格をおよびていることを証明した。いいかえれば、第10章における主要問題は、部門内競争をつうじて市場価値がいかに価格に影響するかということの分析であった。このことは、第10章では部門内競争が重要な問題として考察されてはいるが、やはり価値および剰余価値の理論の部分的な問題（中間の環のひとつ）として考察されている、ということと関係がある。このようにマルクスは第10章のなかでは、部門内競争の特殊性や市場価格にたいするその影響にたいしてではなく、部門内競争が価格形成においてはたず役割の一般的

特徴づけにたいしてとくべつの注意をはらったのである。

マルクスは、当該商品種類にたいする単一市場価格の形成にかんする問題を研究したさいに、つぎの2つのばあいを考察している。〔1〕、市場価格が市場価値にみあっているばあい。〔2〕、市場価格が市場価値から乖離しているばあい。

マルクスが指摘しているように、第1のばあいにおける部門内競争の役割はつぎのことに帰着する。「同じ諸商品、といってもそれぞれ個別的な色合いのちがう事情のもとで生産されている諸商品の市場価格が市場価値と一致して、それより上がることによってもそれより下がることによっても市場価値からかたよらないためには、多くの売り手がたがいに加えあう圧力が、社会的欲望の要求する商品量、すなわち社会が市場価値を支払いうるだけの商品量を市場に出させるに足りる大きさのものであることが必要である⁽⁴²⁾」。

市場価格の市場価値からの乖離はまた、需要と供給のたえまない変動をつうずる部門内競争を媒介にしても実現される。マルクスはつぎのようにのべた。「生産物の量がこの欲望〔社会的欲望——A・コーガン〕をこえれば、商品はその市場価値よりも安く売られなければならないであろう。逆にもし生産物の量が十分に大きくないなら、または、同じことであるが、売り手のあいだの競争の圧力が彼らにこの商品量を市場に出させるに足りるほど強くないなら、商品はその市場価値よりも高く売られなければならないであろう⁽⁴³⁾」。

ひとしい市場価値と市場価格の形成をうながす要因としての、第10章のなかでおこなわれた部門内競争の研究は、価格形成にたいする部門内競争の影響の本質をあきらかにした、すなわちこの問題において基本的なものをあきらかにした。それとともに、資本の核心的構造という視角から競争を考察したさいにこのカテゴリーの特殊的分析を捨象したK・マルクスが、第10章のなかでは市場価格の現実的運動にたいする部門内競争の独特の影響を研究しなかった、とかんがえる有力な根拠がある。たとえばかれは、需要の弾力性を考察しなかった⁽⁴⁴⁾。ところでこの問題は、市場価格の現実的運動を分析するためにはなほ重要なのである。

需要の弾力性——これは複合的な問題である。それは、需要構造にたいする商品の使用価値の影響の分析、商品価格や民間所得にたいする需要構造の依存関係の研究等々をふくんでいる。ここにかぞえあげた3つの現象が価格形成にたいしてどのように影響するかを、抽象的な形ではあるがごくかんたんにのべてみよう。このことは、第10章のなかでマルクスが部門内競争と価格形成との相互連関という問題のどのような側面を捨象したのか、また第10章のなかにふくまれているこの研究のための出発点はどんなものか、という

ことを一目瞭然たらしめる可能性をわれわれにあたえる。

種々ことなつた使用価値は、人々がおかれてゐる諸条件に依存して、人間生活においてひとしくない役割をはたしている。ことなつた使用価値がひとつの欲望を充足することができ、したがって相互代替的でありうる。この客観的事実は、需要の構造にたいして、したがってまた価格にたいして影響をおよぼす。需要構造にたいする商品の使用価値の反作用は、商品価格と民間所得の変化が需要におよぼす影響と密接に関連している。もし白パンの価値の低下と関連してその価格が低下するならば、労働者の手もとには（以前にくらべて）追加的な所得が形成され、それは労働者にたいしてかれの欲望をいっそう完全に充足させる可能性をあたえる。もし労働者が白パンの価格が低下する以前にこの商品の消費を制限しておらず、食肉の消費を制限していたのならば、白パン価格の低下が白パン需要の上昇をもたらすことはない。ところが食肉の需要はひきあげられよう。なぜなら、労働者は節約された貨幣でより多くの食肉を購入するであろうから。その結果、食肉価格は増大する。もし白パンの価値と価格が変化しないのに労働者の賃金がひきあげられるならば、まったくおなじことが生じよう。

食肉の需要と価格のうゑに生じた変化の出発点は、パンの価値の変化と労働者の経済状態の変化であるが、しかし食肉の需要と価格を増加させた直接の原因は使用価値の作用（すなわち、パンにたいする欲望が完全に充足されたのちは、食肉が労働者のもっともさしせまった欲望を充足し、労働者をしていっそう多くの食肉を購入せしめる、ということ）である。

マルクスは、価格形成にたいするうゑにかぞえあげた諸現象の影響を考察しなかつたとはいえ、第10章のなかでそのような研究のための出発点をあたえている。すなわちかれは、需要の弾力性に規定的影響をおよぼすもろもろの要因をごく抽象的な形でのべている（市場価値；すくなくとも平均利潤をもたらすような価格での商品の販売；さまざまの階級相互の関係とそれらの相対的な経済的地位）⁽³⁾。

この問題をこれ以上マルクス主義的に分析することは、競争の特殊的研究にぞくする。この特殊研究は、需要の弾力性にたいするうゑにあげた諸要因の影響を媒介するところのメカニズムをあきらかにしなければならない。

需要の弾力性という問題の解決は、需要と供給と価格のあいだの数量的相互関係の客観的基礎をあきらかにするのに有効である。この問題の本質はつぎの点にある。商品価値が変化しないのに需要が（M量だけ）増加したために価格が（H量だけ）騰貴したものと仮定しよう。そうすると、つぎの問題が生ずる。すなわち、需要がM量増加したことがなぜ

価格を $(H-1)$ 量あるいは $(H+1)$ 量ではなく、 H 量だけ騰貴させることになるのか？ この問題に解答しないかぎり、市場価格の現実的運動を全面的に分析しつくすことはできない。しかし「資本論」のなかでこの問題は分析されていない。それはおそらく、マルクスが市場価格の現実的運動を競争にかんする〔特殊〕理論にふくめたという理由によるのである。

商品の使用価値や商品の価格および民間所得と需要構造との依存関係——これらはすべて市場価値や生産価格よりもいっそう具体的な諸関係である。というのは、まさにこれらの諸関係をとおして市場価値や生産価格は価格にたいして決定的な影響をおよぼすからである。したがって、競争の特殊的研究を「資本論」第3巻第10章にくらべてみると、それは価格形成を分析するさいにおこなわれる抽象から具体へのはてしない上向過程におけるあたらしい段階ということになる。このような研究は、マルクスの価値理論や剰余価値理論と価格形成の実際とのあいだの中間の環となる。この中間の環は、価格形成の実際にたいする価値と剰余価値の決定的作用の実現を媒介するメカニズムをいっそう完全に解明するものであり、したがってまた、マルクスの価値理論と剰余価値理論を具体化するものである。

つぎのような問題が生ずる。すなわち、なぜマルクスは「資本論」第3巻第10章のなかで需要供給の特殊研究をおこなわなかったのか？ これにたいする解答は、マルクスのつぎの論述のなかであたえられている。「資本主義的生産の現実の内的諸法則は、あきらかに、需要と供給との相互作用から説明することはできない（この2つの社会的な推進力のもっとも深い、ここでは場違いな分析はまったく問題外として）。なぜならば、これらの法則が純粋に現実化されてあらわれるのは、ただ需要と供給どが作用しなくなるとき、すなわち両方が一致するときだけだからである。需要と供給とはじっさいにはけっして一致しない。または、いつか一致することがあるにしても、それは偶然であり、したがって科学的にはゼロとするべきであり、起きないものとみなすべきである。ところが、経済学では需要と供給が一致すると想定される。なぜか？ 現象をその合法則的な姿、その概念に一致する姿で考察するためである。すなわち現象を、需要供給の運動によってひきおこされる外観にかかわりなく考察するためである。他方では、需要供給の運動の現実の傾向を見つけだし、ある程度までそれを確定するためである」⁽⁴⁶⁾。

うえに引用したマルクスの命題を考察するさいには、「経済学では需要と供給が一致すると想定される」というマルクスの指示を全体の文脈から独断的にきりはなしてはならな

い。第10章および「資本論」全体の文脈は、K・マルクスがここで念頭においているのがすべての経済学ではなく、ただ資本の核心的構造の理論的分析だけである、ということをしめしている⁽⁷⁾。もしマルクスのこの指示を「資本論」の全文脈からきりはなしてしまうならば、マルクスの理論をこれ以上発展させることは困難となるし、資本主義や社会主義のもとでの価格形成を考察するさいのまちがった志向をうみだしかねない。

需要供給の研究にたいするマルクスの態度を理解するためには、つぎのようなレーニンの方法論的指示を考慮にいれる必要がある。「なんらかの複雑な、錯雑した社会＝経済問題を解決するときには、初歩的な原則として、まずはじめに、事態を複雑にするいっさいの副次的な影響や事情からもっともまぬかれている、もっとも典型的なばあいを取りあげ、それを解決してからはじめてさきにすすんで、事態を複雑にするこれらの副次的な事情をつぎつぎに考慮にいれていくことが必要である⁽⁸⁾」。このレーニンの命題を、われわれが当面している問題にあてはめて具体化してみよう。

商品の市場価格がその市場価値からたえまなく乖離するということはもともと価値法則から生ずるものであり、価値法則と矛盾するものではないということ（このことが「資本論」第3巻第10章の主要課題である）を証明するさいには、需要の構造や価格にたいする商品の使用価値の影響——これが事態を複雑にする副次的な事情である——を捨象する必要がある。

価格形成の基礎には価値法則の作用があるということが証明されたのちには、この科学的命題に依拠しつつ、抽象から具体への上向をつづけてゆき、需要の構造と価格にたいする商品の使用価値の影響とか、需要の構造と商品価格や民間所得との依存関係などのような、事態を複雑にする諸事情を研究することが必要となる。

もしマルクスが、価値理論と価格形成の実際とのあいだの外見上の矛盾を価値理論を非難するために利用する可能性をブルジョア経済学者たちからうばうために、第10章のなかで需要供給の特殊的分析をおこなったならば、それは弁証法的方法の適用をさまたげることになったであろう。F・エンゲルスはK・マルクスあての手紙のなかで、工場主や俗流経済学者が「資本論」をよんださいに発するかもしれないひとつの浅薄な抗弁について指摘し、マルクスがこのような抗弁をあらかじめ顧慮しなかったことはふしぎだとのべている⁽⁹⁾。マルクスは、エンゲルスのこの意見にこたえて、つぎのように強調した。「いまぼくがあらゆるこの種の疑念を前もって刈取ろうとおもうならば、ぼくは弁証法的な展開方法の全体をだめにしてしまうだろう。反対だ。この方法のもつ長所は、連中にたえずわな

をしかけて、このわなが連中の愚鈍さの時ならぬ表白を挑発するということなのだ」⁽²⁰⁾。

「資本論」の範囲外にある競争にかんする特殊理論——それは、需要の弾力性をふくんでおり、おそらくは他の多くの問題をもふくんでいる——は、たんに資本主義経済の分析やとりわけ価格形式の分析にとって重要であるばかりでなく、こんにちなお変装してあらわれているブルジョア的限界効用理論を批判するためにも重要である。

「限界効用」理論の支持者であるブルジョア経済学者たちは、価格にたいする使用価値の影響という事実を検証するさいに、この事実をまちがってとりあつかっている。かれらはこの事実を主要な諸過程——その基底には価値および剰余価値の法則が作用している——からきりはなして考察し、この事実を価格形成分析の前面におしだし、商品の価格は財貨の効用の主観的評価によって規定されると言明している。このような根拠にたつて、マルクスの価値理論ならびにそこから生ずるいっさいの結論が排撃されているのである。

「限界効用」理論の支持者たちは、マルクスの理論を非難するさいに、マルクスが「資本論」のなかで需要の構造や価格にたいする使用価値の影響を考察せず、そのため市場価値と価格のあいだの若干の環をしめさなかったということを利用して⁽²¹⁾。

マルクスの理論のこんごの発展、そしてまさに競争にかんする特殊研究——ここにおいて価値理論と価格形成の実際との外見上の矛盾が理論的に解決されなければならない——のしあげこそは、「限界効用」理論とその現代的変種にたいする強力な打撃となり、価値および剰余価値の理論の確実な擁護となる。

ソヴェトの文献のなかには、需要供給の法則性を敘述しながら競争にかんする特殊理論に関説した研究論文はみあたらない。ところがブルジョア経済学者たちは、市場の景況をうまくのりきるように資本家たちをたすけようところみて、需給法則の研究に多くの注意をふりむけ、そして大量の事実的材料を経験的に一般化しつつ若干の積極的成果をおさめること成功している。しかし、需給問題にたいするブルジョア経済学者たちの態度は、根本的にあやまっている。かれらがおさめた積極的業績のうちに見られる限界のおもな原因もこの点にある。

ブルジョア的「限界効用」理論ならびにそこから生ずるもろもろの弁護論的・反マルクス主義的結論とこの理論の研究対象そのものとは、区別する必要がある。「限界効用」理論の批判は、この理論の研究対象となっている問題のマルクス主義的研究を排除しないばかりか、逆にそれを前提するのである。

これまでの全分析からひきだされる基本的結論は、つぎのことに帰着する。すなわち、

マルクスは「資本論」第3巻第10章のなかで、部門内競争と価格形成との連関を、それが商品の価格と市場価値との一般的依存関係を解明するのに必要となるかぎりにおいて、研究したのである。「資本論」の諸命題と価格形成の実際とのあいだには理論上の中間の環が存在するが、この環は競争にかんする特殊理論によって解明されなければならない。価格形成の実際を「資本論」の理論的諸命題に直接適合させることは誤謬にみちびくし、ブルジョア経済学者たちはマルクス主義を非難するためにこの誤謬を利用することもできよう²²。競争にかんする特殊理論のしあげこそは、マルクス主義的経済科学の重要な課題のひとつである。

- (1) 《Экономисты и математики за круглым столом》. М., 《Экономика》, 1965, стр. 35~40 [「経済学者と数学者の円卓会議」, 1965年, 35~40ページ]。
- (2) 《Письмо Ф.Энгельса к В. Зомбарту от 11 марта 1895г.》 · 《Вопросы истории КПСС》, 1962, No. 2, стр 134 [「В.ゾンバルトあての F.エンゲルスの手紙」, 1895年3月11日 (ソ連邦共産党史の諸問題, 1962年, 第2号, 134ページ)]
- (3) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.23, S.335, 571; Bd.25, S.120, 206~207, 246, 323, 772, 839; Bd.26, Teil 2, S.481, 489, 529; Teil 3, S.48, 351.
〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第23巻, 416ページ, 712ページ, 第25巻, 140ページ, 247ページ, 295ページ, 388ページ, 981ページ, ページ, 「剰余価値学説史」, 黄土社, 第2部, 第2巻, 1948年, 232ページ, 242ページ, 291ページ, 改造社, 第3巻, 1929年, 66ページ, 412ページ, 参照〕。
- (4) Ibid. Bd.25, S.245 [邦訳, 同, 第25巻, 295ページ]。
- (5) Ibid. S.772. [邦訳, 同, 981ページ]
- (6) Ibid. S.839, [邦訳, 同, 1064ページ]。
- (7) Ibid. S.183. [邦訳, 同, 220ページ]
- (8) Ibid. Bd.26, Teil 2, S.197 [邦訳, 「剰余価値学説史」, 国民文庫, 第4分冊, 376~377ページ]。
- (9) Ibid. Bd.25, S.190. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 227ページ]。
- (10) 市場価値は, 当該商品の大部分を生産するのがどんな企業であるか——劣等企業か, 中位の企業か, または優等企業か——によってきまる。
- (11) Vgl. Ibid. S.194. [〔邦訳, 同, 232~233ページ, 参照〕。
- (12) Ibid. S.191. [邦訳, 同, 228ページ]
- (13) Ibid [邦訳, 同]。
- (14) エンゲルスは, 資本主義のもとでの需要供給は, 「競争いがいのなにものでもない

- 」ことを強調した。(K.Маркс и ф. Энгельс. Соч., т.36, стр.101〔「マルクス=エンゲルス全集」(ロシア語版), 第36巻, 101ページ〕)。
- (15) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.25, SS.190~191, 198~199, 204~206〔邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 227~229ページ, 236~238ページ, 243~247ページ, 参照〕。
- (16) Ibid. SS.199.〔邦訳, 同, 238~239ページ〕。
- (17) マルクスがこの命題をのべたさいに, 括弧のなかで, 「この2つの社会的推進力(需要と供給……A・コーガン)の, もっと深い, ここでは場違いな分析……」, と書いたのは意味深長である。
- (18) В.И.Ленин, Полн. собр. Соч., т.6, стр.328.〔邦訳, 「レーニン全集」, 前出, 第6巻, 124~125ページ〕。
- (19) См.К.Маркс и ф. Энгельс, Соч., т.31, стр.264.〔邦訳, マルクス/エンゲルス, 「資本論にかんする手紙」, 前出, 上, 155ページ, 参照〕。
- (20) Там же. стр.266 (邦訳, 同, 160ページ)。
- (21) 方法的にみると, 限界効用理論の立場からするマルクス理論の非難は, 「資本論」第3巻が公刊される以前に「資本論」第1巻にくわえられた非難と, 多くの点で似ている。
- (22) マルクスは, 具体的なものを抽象的なものに直接適合させようとする方法を批判したさいに, つぎのようにのべた。「……こうしたやり方は, ……反対者たちのいっさいの攻撃よりもはるかに大きくリカード理論の全土台を崩壊せしめたのである……」(Marx-Engels, Werke, Bd.26, Teil 3, SS.83~84〔邦訳, 「剰余価値学説史」, 改造社, 第3巻, 1929年, 109ページ〕)。

(第3論文)

K. マルクス「資本論」における信用研究の方法論

この論文のなかでわれわれは, K・マルクス「資本論」における信用研究の方法論の若干の問題を考察する。この問題の重要性は, 第1に, 帝国主義のもとでは信用関係が経済の全部面をつらぬいているということによって規定されており, また第2に, ソ連邦その他の社会主義諸国でおこなわれている経済改革と関連して, 社会主義経済における銀行信用の役割が大いに高まっていることによっても規定されている。

貸付利子と信用の個別的分析

マルクスは, 15年におよぶ資本主義経済の研究ののち1857~1858年の時期に, 「経済学

批判体系」プランをつくりあげたが、そのなかで信用関係の研究は重要な位置をしめている。わが国の文献ではこのプランが6巻本プランとよばれている。

第1巻第1部（「資本一般」）のなかでK・マルクスは、資本の核心的構造の研究、したがって剰余価値理論の研究を予定していた。この部の第3部分では、剰余価値の分配および剰余価値の転化諸形態を考察するはずであったが、K・マルクスはここに貸付利子の研究をふくめた。またかれは、信用の分析を剰余価値理論の枠からはずして信用にかんする特別の部にもちこんだ。そこで、6巻本プランにしたがうと、剰余価値の転化形態としての貸付利子の研究と信用の研究とが別々におこなわれなければならなかった。信用関係の研究にたいするK・マルクスの態度——それは6巻本プランのなかに反映している——は、深い客観的基礎をもっている。この基礎の解明をこころみてみよう。

貸付利子を剰余価値理論のなかにふくめることは、貸付利子が剰余価値の転化形態であり、剰余価値生産過程そのものの独自性によってうみだされる、ということによって客観的に条件づけられている。

剰余価値の生産過程はまた、一時的に遊離された貨幣資金を資本の特殊形態である貸付資本として分離独立させるのである。それゆえにまた、独特の資本形態としての貸付資本の分析も、剰余価値理論のなかにふくまれるのである。この分析はつぎのような一連の問題をふくんでいる。すなわち、資本所有としての貸付資本、独特の商品としての貸付資本、貸付資本の特殊な運動形態、貸付資本譲渡の独自形態、資本物神の最高形態としての貸付資本、もっとも寄生的な資本形態としての貸付資本⁽¹⁾。

貸付資本が分離独立する結果、貸付利子は剰余価値の安定した転化形態となる。「……ただ、資本家が貨幣資本家と産業資本家とに分かれるということだけが、利潤の一部を利子に転化し、一般に利子という範疇をつくりだすのである。そして、ただこの2つの種類の資本家のあいだの競争だけが利子率をつくりだすのである」⁽²⁾。かくして、貸付資本の研究は、剰余価値の転化形態としての利子の分析と直接むすびついているのである。

あらゆる経済的関係とおなじように、貸付資本も内容と形式をそなえている。貸付資本の内容——それは、独特の種類資本としての貸付資本の特質を規定している上記のもろもろの根本的法則性の総体である。これらの法則性の運動形式となっているのが信用制度である（専門化された信用機関、その機能など、すなわち資本貸付の実施を保障しているものいっさい）。運動形式としての信用制度は、主として、また基本的な点では、これらの根本的法則性によって規定されており、同時にまた相対的にはこれらの法則性から独

立している（内容にたいする形式の相対的独立性——これは一般科学的法則性である）。それゆえ、狭義の貸付資本（貸付資本の内容）と広義の貸付資本（貸付資本の内容と形式の弁証法的相互連関、すなわち、全多様性における貸付資本）とを区別すべきである。

すでに指摘したように、貸付資本の内容は剰余価値理論の範囲内で解明される。信用制度の研究はどの程度まで剰余価値理論のなかにはいりこむのか、という点を解明してみよう。

マルクスは、信用制度の発生が産業資本によって条件づけられているということ、それが資本主義にとって独自のものであるということ、をたびたび強調した。

剰余価値のうちに表現される資本主義の基本的生産諸関係と信用制度とのあいだに存在する連関の分析は、信用制度の起源および資本主義社会における信用制度の役割、すなわち資本主義的生産関係にたいする信用制度の一般的依存関係をあきらかにする。このような分析は、剰余価値理論のうちにふくめることができる。

しかし、はなはだ複雑なメカニズムとしてあらわれる信用制度は、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる運動をももっている⁽³⁾。この運動は、信用施設の専門化を規定しているもろもろの法則性のなかに発現し、資本主義的再生産の行程にたいする各種の銀行業務の反作用のうちに発現し⁽⁴⁾、また消費者信用や抵当信用などの特質のなかに発現する。K・マルクスは、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動の分析を、あきらかに「資本一般」の部から、つまり剰余価値理論の枠からはずして、信用にかんする特別の部にもちこんだ。この運動は剰余価値理論によって研究される運動にくらべていっそう具体的な諸関係を表現するものである。

うえにのべたことに関連して想起されるのは、B・H・レーニンのつぎのような方法論的命題である。「なんらかの複雑な、錯雑した社会＝経済問題を解決するときには、初歩的な原則として、まずはじめに、事態を複雑にするいっさいの副次的な影響や事情からもっともまぬかれている、もっとも典型的なばあいを取りあげ、それを解決してからはじめてさきにすすんで、事態を複雑にするこれらの副次的な事情をつぎつぎに考慮に入れていくことが必要である」⁽⁵⁾。「資本一般」の部において剰余価値の理論をしあげるさいには、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動の特殊性は、「事態を複雑にする……副次的な事情」としてあらわれるのであって、これの考察は捨象しなければならない。剰余価値理論のしあげが深くまた広くなればなるほど、研究はいよいよ複雑で困難なものとなり、弁証法的方法とそこから生ずるかかる抽象の必要はいよいよ大きな意義をも

つようになる。剰余価値理論をしあげたのちに必要となるのは、これを理論的土台としながら、抽象から具体への上向をつづけることであり、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動の特殊的分析をあたえること、すなわち信用にかんする特殊理論をしあげることである。

剰余価値の理論と信用にかんする特殊理論とはおたがいに密接に連関しており、両者のあいだの境界は相対的なものである。とりわけこの連関は、貸付資本の分析のさいにあらわれてくる。貸付資本の分析は、剰余価値理論のなかにも、信用にかんする特殊理論のなかにもふくまれる。独特の種類資本としての貸付資本の一般的特徴づけは剰余価値理論のなかでのみ前面にでてくるものであって、信用にかんする特殊理論のなかでは、信用制度において最高度にあらわれる貸付資本の相対的自立性にたいしてとくべつの注意がはらわれる⁽⁶⁾。この命題を具体的にのべてみよう。

貸付資本は信用制度をつうじて架空資本をうみだすが、後者は貸付資本の独特の形態としてあらわれ、固有の運動をおこなう⁽⁷⁾。架空資本は、剰余価値の生産とは直接むすびついていないような剰余価値再分配のために利用される。架空資本は、剰余価値にたいする関係でみると、第2次的な導関数である。

剰余価値理論の枠内で貸付資本の一般的特徴づけをあたえるばあいには、貸付資本のなかにふくまれている架空資本形成の可能性と必然性をあきらかにしなければならない（たとえ架空資本とむすびついているもろもろの重要かつ複雑な経済現象の総体が剰余価値との一般的依存関係の枠のなかで作用している、ということを実証するためだけであっても）。だが信用にかんする特殊理論のなかで主要な研究対象とされなければならないのは、貸付資本の独特の形態としての架空資本なのである。

剰余価値の理論と信用にかんする特殊理論との相互滲透は、両者の分界づけを困難にする。その結果、剰余価値の理論においては、貸付資本と貸付利子が考察される篇のなかに信用のすべての問題をふくむことができる、という表象が生ずるかもしれない。

いったいマルクスは、「資本論」を執筆しているとき、信用の特殊的分析を剰余価値理論の枠からはずすことが必要であるという考え方をもちつづけていたのだろうか？ という問題が生ずる。このような問題提起は、まずもって、「資本論」第3巻第5篇のなかでは剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動とむすびつきたいいくつかの問題もまた考慮されている、ということに由来するのである。そのような問題にふくまれるのは、架空資本、信用制度のもとでの流通手段、1844年のイギリスの銀行立法、金準備の連

動、為替相場、である。提起された問題にこたえるためには、「資本論」第3巻第5篇にたちもどってしらべてみる必要がある。

「資本論」と信用にかんする特殊理論

K・マルクスは、「資本論」第3巻第5篇の研究対象をつぎのように規定している。「利子と企業者利得とへの利潤の分裂、利子生み資本」。

マルクスは、第5篇第21～24章で、利子生み資本の本質分析に依拠しつつ、貸付利子の独自の特徴および貸付利子と利潤との差異をあきらかにした。これらの章のすべての材料は、資本の核心的構造の研究と、剰余価値理論のしあげと、有機的にむすびついている。

マルクスは、第5篇のつづく諸章（第25～35章）のなかで、貸付資本の研究をつづけ、貸付資本の運動形態としての信用制度を考察した。これらの章の特質となっているのは、ここではたんに剰余価値理論の諸問題が分析されているばかりでなく、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動、すなわち信用にかんする特殊理論と関係のある材料もまた存在している、という点である。

K・マルクスは、「貨幣資本と現実資本」という共通の表題をもつ、第30～32章のなかで、貸付資本の蓄積と現実資本の蓄積との比較分析をおこなった。マルクスは、貸付資本の蓄積がけっきょくは現実資本の蓄積によって規定されていること、産業循環の行程中に観察されるような両者の運動における対立でさえもつまるところ現実資本の運動によって規定されているということ、を指摘している。こうした分析は、貸付資本が現実的産業資本のうちの特殊化された一部であることを証明するために、必要であった。それゆえにK・マルクスはこの分析を剰余価値理論のなかにふくめたのである。剰余価値理論のしあげにとってこの分析がもっている重要性は、2・3のブルジョア経済学者たち（〔たとえば〕リチャード・プライス Richard Price）が貸付資本の蓄積を考察するさいに再生産や労働の諸条件を顧慮することなく永久に増大する価値という属性にかんするまちがった結論をひきだした、ということと関連して増大した⁽⁸⁾。

しかし貸付資本蓄積の問題は、もうひとつの側面をもっている。問題は、「貸付資本の蓄積は⁽⁹⁾」信用制度そのもののおかげで「少しも現実的蓄積なしに……おこなわれうる⁽⁹⁾」という点にある。この側面は、剰余価値理論の枠外にでてしまい、信用にかんする特殊理論にふくめられる。ところが第30～32章では、貸付資本はまさにこの側面においても考察されているのである。

いったいなぜ「資本論」第3巻第5篇のなかで信用にかんする特殊理論のいくつかの問題が研究されることになったのかを正しく理解するためには、Fエンゲルスが「資本論」第3巻への序文で指摘したつぎのような事実を考慮にいれる必要がある。第5篇のすべての章のなかでもっとも完全に仕上げられていたのは第21～24章であり、そこではこの篇の問題のうち剰余価値理論と有機的にむすびついている主要な諸問題（利子と企業者利得とへの利潤の分裂、利子生み資本の本質）が直接研究されていた。

第5篇のうち信用制度が考察されている諸章、とりわけ第30～35章は、もっとも不完全に仕上げられていた。たとえば、第31章と第33章とのあいだの材料の一部は、「混乱」と題された長い1篇からなっていた。そのなかでマルクスは、「貨幣市場では何が貨幣であり何が資本であるのかについて⁽⁴⁰⁾」資本家やブルジョア的経済理論家のもとで明るみにでてくる混乱を考察したのである。F・エンゲルスの言葉によると、この篇は、「1848年と1857年との恐慌にかんする議会報告からの抜き書きだけからなっていて、そこでは、ことに貨幣と資本、金流出、過度投機などにかんする2・3の実業家や経済著述家の陳述がまとめあり、あちこちにユーモラスな短かい傍注がつけてある⁽⁴¹⁾」ということである。第23章のあとには、「この篇でふれられたありとあらゆる対象にかんする議会報告からのあらたな1群の抜き書きに著者の長短の評言をませたもの⁽⁴²⁾」がつづいていた。エンゲルスは、「混乱」からあとのすべての未完成材料から、第33, 34, 35章をまとめあげたのである⁽⁴³⁾。

F・エンゲルスは第5篇を特徴づけて、つぎのようにのべている。「ここにはできあがった草案がなく、これから中身を入れるはずだった筋書きさえもなく、ただしあげの書きかけがあるだけで、それも1度ならず抜き書きの形での覚え書きや注意書きや材料やの乱雑な堆積におわっているのである」⁽⁴⁴⁾。エンゲルスのこれらの言葉は信用制度を考察した諸章にもっともよくあてはまる、とかんがえるすべての理由がある。

うえにのべたことからわかることは、第25～35章の材料を印刷用に準備するさいには根本的に改作しなければならなかった、ということである。

マルクスは第5篇を印刷用に準備することをはたさなかったが、F・エンゲルスがこれをなしとげた。エンゲルスは、第5篇の編集についてかたったさい、はじめは「この篇が著者のあたえようと意図したすべてのものを少なくともおおよそは提供するように⁽⁴⁵⁾」材料を加工するところみを少なくとも3度やってみた、と書いた。しかし、F・エンゲルスは、このようなところみを放棄せざるをえなかった。なぜなら、こうしたところみを実現

するには信用にかんする膨大な文献をあさりつくさなければならなかったからであり、また最後になにかできあがったにしても、「それはマルクスの著書ではないものになったであろう⁽⁹⁾」からである。エンゲルスは、第5篇の編集にさいして、主としてマルクスによって書かれたものの整理だけに〔自分の仕事を〕限定したのである。

ところで第5篇のこのような加工は、K・マルクスがあたえようと意図したもののすべてを提供するという結果をうるために、どのような方向でおこなわれるべきであったか？マルクスのつぎのような指示はこの問題にたいする解答をあたえている。

K・マルクスは「資本論」第3巻第5篇第22章において、つぎのように強調している。「本章の対象は、もっとあとで取り扱われる信用の現象もすべてそうであるように、ここで細目にわたって研究することのできないものである。貸し手と借り手とのあいだの競争やその結果としての貨幣市場の短期的諸変動は、われわれの考察範囲にははまらない。産業循環の進行中に利率が通る循環は、その説明のためには産業循環そのものの説明を前提するのであるが、この産業循環の説明もここですることにはできない。同じことは、世界市場での利率の大なり小なりの近似的な均等化についても言える。われわれがここでしようとするのは、ただ、利子生み資本の独立した姿と、利潤にたいする利子の独立化とを展開することだけである⁽¹⁰⁾」。

ここにのべられた言葉は、第5篇が最終的に加工されたあかつきには、信用は、利子生み資本の自立的形態の解明および利潤にたいする利子の独立化の解明にとって必要なかぎりでのみ考察されるべきであり、またマルクスは信用の固有の運動の特殊的分析を「資本論」の枠外にとりだす意図をもっていた、とかんがえる根拠をあたえている。

マルクスのつぎの言葉もまた、大きな興味をそそる。「信用制度やそれが自分のために作りだす諸道具（信用貨幣など）のくわしい分析はわれわれの計画（「資本論」プラン——A・コーガン）の範囲にははまらない。ここでは、ただ、資本主義生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかばかりの点を明らかにするだけでよい。そのさいわれわれはただ商業信用と銀行信用を取扱うだけにする。この信用の発展と公信用の発展との関係は考察しないでおく」⁽¹¹⁾。第25章、つまり信用制度の研究が、まさにマルクスのこの言葉ではじまっていることは、示唆的である。マルクスのこの言葉によって、第25～35章の材料を最終的に加工するさいにマルクスは信用の分析を資本主義生産様式一般の特徴づけに必要な若干の数少ない点にだけかぎろうと意図していた、とかんがえる根拠があたえられる。

K・マルクスは同じ第25章のなかで、銀行をふくむ信用施設のかんたんな（2ページ分）

特徴づけをあたえたのち、つぎのように書いた。「特殊な信用施設、または銀行そのものの特殊な諸形態は、われわれの目的のためにはこれ以上くわしく考察する必要はない⁽⁹⁾」。このことは、第5篇におけるマルクスの主要問題が信用制度の特徴である専門化の解明ではなく、資本として貸付けられる貨幣が実際には借手の手中で資本に転化することの解明である、ということとあきらかにむすびついている。この過程の分析がマルクスにとって重要であったのは、それによって資本の核心的な構造の解明と剰余価値理論のしあげが高度に可能となったからである。

うえにのべたすべてのことから結論ができることは、第25～35章を最終的に加工するさいの第5篇の基本線の敷設が、これらの諸章のなかで、資本の核心的構造や剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動と直接にむすびついていない材料を、信用にかんする別の著作のなかに移すことを予定していた、ということである。

つぎのような問題が生ずるかもしれない。すなわち、もしK・マルクスが第25～35章の材料の一部を「資本論」のなかにくくめることを予定していなかったとすれば、この材料が「資本論」第3巻の草稿のなかにはいりこんでいたのはなぜか？ この問題に解答するためには、研究の下書き過程と研究結果の叙述形式とのあいだの相違を考慮に入れる必要がある。

第5篇の基本的な諸問題（利子と企業者利得への利潤の分裂、利子生み資本）の研究は、信用制度の全多様性を知ることを前提しており、後者はまた信用にかんする特殊理論にぞくする諸材料をふくんでいる⁽¹⁰⁾。ところが第5篇におけるこれらの問題の叙述は、それに直接かかわるものだけを一般化し、信用にかんする特殊理論をなす諸材料をとりのぞくことを前提する。この叙述の例解をこころみてみよう。

実在の資本主義的現実においては、貸付けられる貨幣が資本主義的生産につかわれずに軍隊の維持などにつかわれるばあいが、たえずみうけられる。ところがその貨幣の所有者はあいかわらず平均利子率をうけてっているのである。その結果、利子というものは、剰余価値の生産とはいかなる関係ももたず、貨幣自体によってうみだされもすれば信用取引によってもうみだされる、という幻想が作りだされる。K・マルクスは、利子と企業者利得とへの利潤の分裂および利子生み資本の本質の叙述に着手するにさきだって、うえにあげた事実が貸付利子は剰余価値の転化形態であるという第5篇の基本的結論をくつがえしはしないということを確認しておかなければならなかった。そしてこのような確認をうするためには、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動を分析しつくすこと

が必要であった。だが、第 5 篇の基本的な諸問題を叙述するさいには、このような信用の運動は捨象されなければならなかった。

エンゲルスによると、覚え書きや注意書きの「乱雑な堆積」におわっている点に第 5 篇の差別的特徴があるのであるが、それゆえにこの草稿中には第 5 篇の基本的諸問題の叙述ばかりでなく、これらの問題の研究や、さらには多くのナマの材料もあたえられていたのである。だから、この草稿が、信用にかんする特殊理論にふくまれ、また最終的加工のさいには「資本論」のなかにいれるべきでないような材料をふくんでいたことは、まったく当然であった。この結論は、文献的にも確証される。

第 3 卷第 5 篇のなかには、1857 年と 1858 年の銀行にかんするイギリス議会報告からの多数の断片がマルクスの評言とともに存在している。第 33～35 章——そこでは他の諸章にくらべると信用にたいしていっそう大きな注意がはらわれている——は、だいたいにおいてこの材料から F・エンゲルスがまとめあげたものである。1857 年と 1858 年の銀行にかんするイギリス議会報告にたいして K・マルクスがもっていた意図については、1865 年 8 月 19 日づけで、つまり第 5 篇の草稿にたいする作業が完了した時期に、F・エンゲルスあてに書かれたマルクスの手紙がものがたっている。「1857 年と 1858 年の銀行事業などにかんする議会報告——これをぼくはついさきごろよみかえさなければならなかった——にみられるようなまったくのナンセンスについて、君はほとんど何も知らないだろう。……ぼくがこの絶品をまるまる批判できるのはただ、つづきの著述のひとつのなかでだけだ」²³⁾。マルクスがここでかたっている「資本論」につづく著述が信用にかんする著述だとかんがえる十分の理由がある²⁴⁾。

第 5 篇の下書き草稿のなかには資本の核心的構造の分析と直接関係のない材料が存在するという事実そのものは、K・マルクスが最終的加工のさいにこの材料を「資本論」にふくめる意図をもっていたということの証明となりえない。

第 5 篇の最終的加工についてマルクスがいただいていた意図をあますところなくあきらかにすることは、不可能である。しかし、うえにのべたことすべては、もし K・マルクスが第 5 篇第 25～35 章の材料を自分で印刷用に準備したとすれば、この材料のうち資本の核心的構造の分析と直接むすびついておらず、剰余価値から相対的に独立しておこなわれる信用の運動と直接むすびついていない部分、信用にかんする特別の著作のなかにうつしたであろう、とかんがえる重大な根拠をあたえる。

「資本論」のなかでは信用関係がどの程度研究されているのかという問題を考察するさ

いには、つぎのこともまた考慮にいれる必要がある。「資本論」第3巻第5篇の下書き草稿のなかに信用にかんする特殊理論にふくまれるべき材料がはいっていたとしても、この草稿によっては信用にかんする特殊理論の問題領域はとてつくみつくされるものではない。この理論のなかには、草稿のなかでは考察されなかつたつぎのような諸問題もふくまれるのである。すなわち、貸手と借手との競争、この競争の帰結、貨幣市場の短期的動揺、国家信用にたいする商業信用と銀行信用との関連、地代と賃金による貨幣資本の蓄積、抵当貸付信用、消費者信用、国際信用（世界市場での利子率の均等化をふくむ）、信用施設と銀行の独自の諸形態、資本主義的再生産にたいする各種銀行業務の反作用、貸付資本回転の特質、銀行の流動性、貸付資本の運動と直接むすびついていない銀行機能（たとえば、手形業務）。

信用の問題領域のうち第5篇の下書き草稿のなかにはいらなかつたものについてかたるさいに、さらにつぎのことに注意しておくのが有益である。K・マルクスは、1856年につぎのように書いた。すなわち、フランスの銀行「クレディ・モビリエ〔Crédit Mobilier〕」は現代のもっとも奇態な経済現象のひとつになっており、徹底的な検討をもとめている。このような検討をしなければ、フランス帝政の運命を測定することもできないし、また全ヨーロッパにあらわれている全面的な社会変動の諸兆候を理解することも不可能である⁸⁴。そしてK・マルクスは、「ニューヨーク・トリビューン」紙のために1856年に書いた連続論文のなかで、クレディ・モビリエ銀行の活動力に深い分析をあたえた。ところが、マルクスは、第5篇のなかにこの材料をふくめなかつたのである。

信用関係にぞくしていながらマルクスが「資本論」第3巻第5篇のなかにふくめなかつた広汎な問題領域〔があるということは〕、「資本論」が完成したのちに信用にかんする特殊理論がしあげられるべきだという意見をマルクスがもっていたことの重要な証明となる。

K・マルクスは「資本論」を執筆しているあいだにも信用関係研究の方法論を改善しつづけた、ということ強調しておくことは重要である。1862～1863年に書かれた「剰余価値学説史」の第3部分のなかで、K・マルクスはつぎのようにのべている。「一般的利潤率に照応するものは、もちろん一般的利子歩合または一般的利子率である。この問題をこれ以上ここで解明することは、われわれの意図ではない。なぜなら、利子つき資本の分析は一般論の部にぞくするのではなく、信用にかんする部にぞくするからである。しかし、資本のこのような発現形態の完全な解明にとっては、かの一般的利潤率は利子歩合または

利率ほどに明白な確固たる事実としてはけっしてあらわれない、という点に注意することが重要である⁶⁸⁾。さらにK・マルクスは、かれがしめした一般的利潤率と利率との差異の原因を概略的にあきらかにするために、利子生み資本の内容をかんとんに(5ページ分)考察している。

マルクスのこの言葉を考察するまえに注意しておきたいことは、K・マルクスが「一般論の部」とか「信用の部」とかの用語をつかっているばあい念頭においているのは、6巻本プランのなかの「資本一般」の部と「信用」の部であることはあきらかだ、ということである。このことは、マルクス=エンゲルス著作集第2版第26巻の編集者によってつけられた注のなかで、はっきりのべられている⁶⁹⁾。

うゑに引用したK・マルクスの言葉およびそれにつづく利子生み資本の内容のかんとんな分析からひきだされるのは、つぎのことである。すなわち、1862~1863年のK・マルクスは、資本一般を研究するさいにではなく、信用にかんする特殊理論のなかで、利子生み資本をくわしく考察しようと意図していたということ、またこれに関連して、剰余価値の転化形態としての一般利潤率と利率の十分な分析にも限界をもうけていたということ、さらに、一般利潤率と利率の研究にさいしては、利子生み資本のかんとんな分析なしにすますことは、やはりできない、ということである。

K・マルクスのこの言葉は、一面では、信用関係の研究にたいするマルクスの態度が1862~1863年と1864~1865年では根本的にちがっていることをしめしているが(1864~1865年の「資本論」第3巻第5篇の草稿では、この篇の2つの基本問題のうちのひとつが考察されている)、他面では、そのなかにこの相違を克服するための可能な方途——つまり、剰余価値理論のさらにくわしいしあげのさいに利子生み資本のくわしい分析をもあたえる——がみとめられる。そして1864~1865年にマルクスが「資本論」第3巻第5篇のなかで利子と企業者利得とへの利潤の分裂過程をいっそうくわしく研究しようと決意したとき、かれはそこで利子生み資本を一定の側面からくわしく分析したのである⁷⁰⁾。しかしマルクスは、1864~1865年においても、貸付資本の〔諸側面のうち〕剰余価値理論のしあげとは直接むすびついていない側面の分析を「資本論」の枠からはずして信用にかんする特殊理論のうちにもちこむことを予定していたのである。

F、エンゲルスは、「資本論」に依拠しておこなわれる将来の信用研究が大きな創造的可能性をもっていることを指摘した。かれは、K・シュミットにたいして信用と貨幣市場にかんするかれ〔K・シュミット〕の著書を未完成のままにしておくように忠告したさ

い、つぎのように書いている。「あなたはそこで〔「資本論」第3巻のなかで〕この問題にかんする多くのあたらしいものおよびさらに多くの未解決のものを発見するでしょう。したがって、あたらしい解決とともにあたらしい問題をみいだすことになるでしょう」⁽²⁴⁾。

信用にかんする特殊理論は、抽象から具体への上向において「資本論」のあとにつづく段階であるという結論⁽²⁵⁾は、マルクスの後継者たちがおこなったような資本主義信用制度の研究と「資本論」との有機的連関、継承関係をあきらかにすることをたすけ、マルクス主義的信用理論におけるマルクスの後継者たちの貢献およびそれをいっそう発展させるための創造的可能性を一目瞭然たらしめる。

マルクスが予定はしていたがうまくしあげることのできなかった信用にかんする特殊理論の問題領域がどれくらいさしせまったものであるのか？ という疑問が当然のことながら生ずる。

B・H・レーニンが指摘したように、資本主義一般のもろもろの現象と過程は、帝国主義のもとでも変容された形で存在している。だからまた、信用にかんする特殊理論にふくまれるはずの、そして「資本論」のなかではマルクスが捨象したような、信用の諸現象は、おなじく帝国主義のもとで変容されて存在する。

抽象から具体への上向法は、どんな現象もこの現象の萌芽形態から出発して分析しなければならない、ということを前提している。このような分析の途上で、現象の矛盾した本質があきらかにされ、この本質の可能な発展傾向があきらかにされる。獲得された成果を理論的土台としてそれに依拠しながら、つぎの1歩をすすめる必要がある、すなわち、この現象〔信用〕の現代的諸形態が考察されなければならない。したがって、抽象から具体への上向法という見地からすれば、K・マルクスが「資本論」のなかで捨象したような信用現象の現代的諸形態の分析は、19世紀中葉に存在していたこれらの現象の萌芽形態の研究を第1歩として前提している。かくして、信用にかんする特殊理論は抽象から具体への上向の鎖としてあらわれ、この鎖のなかで第1の基本的な環をなしているのは資本一般に固有の信用法則であり、第2の環はそれの帝国主義的変容である。それゆえ、19世紀中葉にたてられた信用にかんする特殊理論の問題領域は、こんにちにおいてもその現実性をうしなっていないのである。これらの問題をしあげることによって、現代における資本主義信用の「底土」をいっそう深く掘りかえす可能性があたえられる。

- (1) См. Э.Я.Брегель. Политическая экономия капитализма. М., «Международные отношения», 1966, стр.280~281 [Э.Я.ブレーゲリ, 資本主義の経済学, 1966年, 280~281ページ]。
- (2) Marx-Engels, Werke, Bd.25, s.383 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 463~464ページ]。
- (3) F・エンゲルスがのべたように, 所与の生産様式において決定的役割を演ずる経済的カテゴリーは他のもろもろの経済的カテゴリーの運動を支配しているが, しかしこのことは, 後者の相対的自立性, すなわち支配的な経済的カテゴリーにたいする「一般的依存関係」の枠内でおこなわれる後者の「固有の運動」を排除しないばかりか, 逆にそれを前提するものである (См.К,Маркс и Ф.Энгельс, Соч., т.37, стр.415~416 [邦訳, マルクス/エンゲルス「資本論にかんする手紙」前出, 下, 371ページ, 参照]。
- (4) 資本主義のもとでは, 「再生産過程の全関連が信用を基礎としている」 (Marx-Engels, Werke, Bd.25, s.507 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 627ページ]。)
- (5) В.И.Ленин, Полн. собр. Соч., т. 6, стр.328 [邦訳, 「レーニン全集」, 前出, 第6巻, 124~125ページ]。
- (6) 「発展の原理からみるならば, どんな対象でも, すくなくとも諸科学の全隊列のなかで隣接する2つの科学によって研究することができる」 (Б.М.Кедров, Классификация наук, кн. 2, 1965, стр.475 [Б.М.ケドロフ, 諸科学の分類, 1965年, 75ページ])。
- (7) 「恐慌時には貸付資本にたいする需要は概して増加する, ところが有価証券市場の役にたつ貸付資本の需要がまさに減退するのである」
(И.А.Трахтенберг. Денежное обращение и кредит при капитализме, М., Изд-во АН СССР, 1962, стр.524 [И.А.トラハテンベルク, 資本主義のもとでの貨幣流通と信用, 1962年, 524ページ])
- (8) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.25, ss.408~409 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第25巻, 495~497ページ参照]。
- (9) Ibid. s.521. [邦訳, 同, 633ページ]。
- (10) Ibid. s.13. [邦訳, 同, 10ページ]。
- (11) Ibid. [邦訳, 同]。
- (12) Ibid. [邦訳, 同, 11ページ]。
- (13) Ibid. s.14. [邦訳, 同]。
- (14) Ibid. s. 8 [邦訳, 同, 7ページ]。
- (15) Ibid. s.12. [邦訳, 同, 9ページ]。
- (16) Ibid. s.13. [邦訳, 同, 10ページ]。

- (17) Vgl. Ibid. [邦訳, 同, 参照]。
- (18) Ibid. s.370. [邦訳, 同, 447ページ]。
- (19) Ibid. s.413 [邦訳, 同, 502ページ]。
- (20) Ibid. s.417 [邦訳, 同, 507ページ]。
- (21) 信用制度の全多様性を知りつくしてはじめて, どんな材料が剰余価値理論のしあげと直接むすびづいていのか, またどんな材料を信用にかんする特殊理論にもちこさなければならぬか, ということを決めることができるだろう。
- (22) К.Маркс и Ф.Энгельс, Соч., т.31, стр.124~125. [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 改造社, 第19巻, 1930年, ページ]
- (23) F・エンゲルスが「資本論」第3巻への序文のなかで, かれが印刷用に準備した第5篇の草稿がマルクスがしようとのぞんでいたものといくらがちがっているとき, かれの念頭にあったものが1857年と1858年の議会報告にかんするマルクスの意図であったことはあきらかである。
- (24) Marx-Engels, Werke, Bd.12, s.22 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 第12巻, 22ページ]
- (25) Ibid. Bd.26, Teil 3, s.460 [邦訳, 「剰余価値学説史」, 改造社, 第3巻, 前出, 526ページ]。
- (26) Ibid. ss.640~641 (Anmerkungen130)。
- (27) К・マルクスが「資本論」第3巻の第1篇において, 「一般的利潤率は利子歩合または利子率ほどに明白な確固たる事実としてはけってあらわれない」ことの原因をくわしく考察していることは, 示唆的である。К・マルクスは, これとの関連において利子生み資本も詳細に研究している。
- (28) К.Маркс и Ф.Энгельс, Соч., т.38, стр.108 [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 改造社, 第22巻, 1931年, 418ページ]
- (29) わたくしの論文「К・マルクス「資本論」のいくつかの方法論的問題」——これは「経済科学」誌(1966年, 2号)のなかで発表された——のなかでは, マルクスが他の特殊的諸理論(競争, 株式資本, 土地所有, 賃労働, 国家, 外国貿易, 世界市場にかんする)をも「資本論」の枠からはずした, ということをしめしておいた。

〔訳注〕

- (1) 訳文中〔 〕のなかは訳者が挿入したもの
- (2) ここにあげられている著者の主要著書はつぎのとおり (A・A・ジノヴィエフについては不明)

Э.В.Ильенков, «Диалектика абстрактного и конкретного в “КАЦИТАЛЕ,, Маркса», Академия наук СССР, М., 1960г.

М.М.Розенталь, «Диалектика в “КАПИТАЛЕ,, К.Маркса» 2-е

изд. М., 1967г.

В.Н.Типухин, «Метод восхождения от абстрактного к конкретному в „КАПТАЛЕ” К.Маркса», Академия общественных наук при ЦК КПСС. М., 1958г

- (3) Vgl. Marx-Engels, Werke, Bd.25, ss184~185. 905, [邦訳, 「マルクス=エンゲルス全集」, 前出, 221ページ, 1143ページ, 参照]